

521
I.89
2④

相實の築建本日

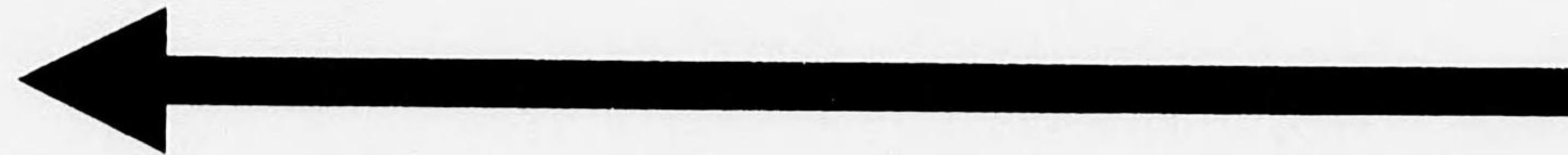
著太忠東伊



社陽太新

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

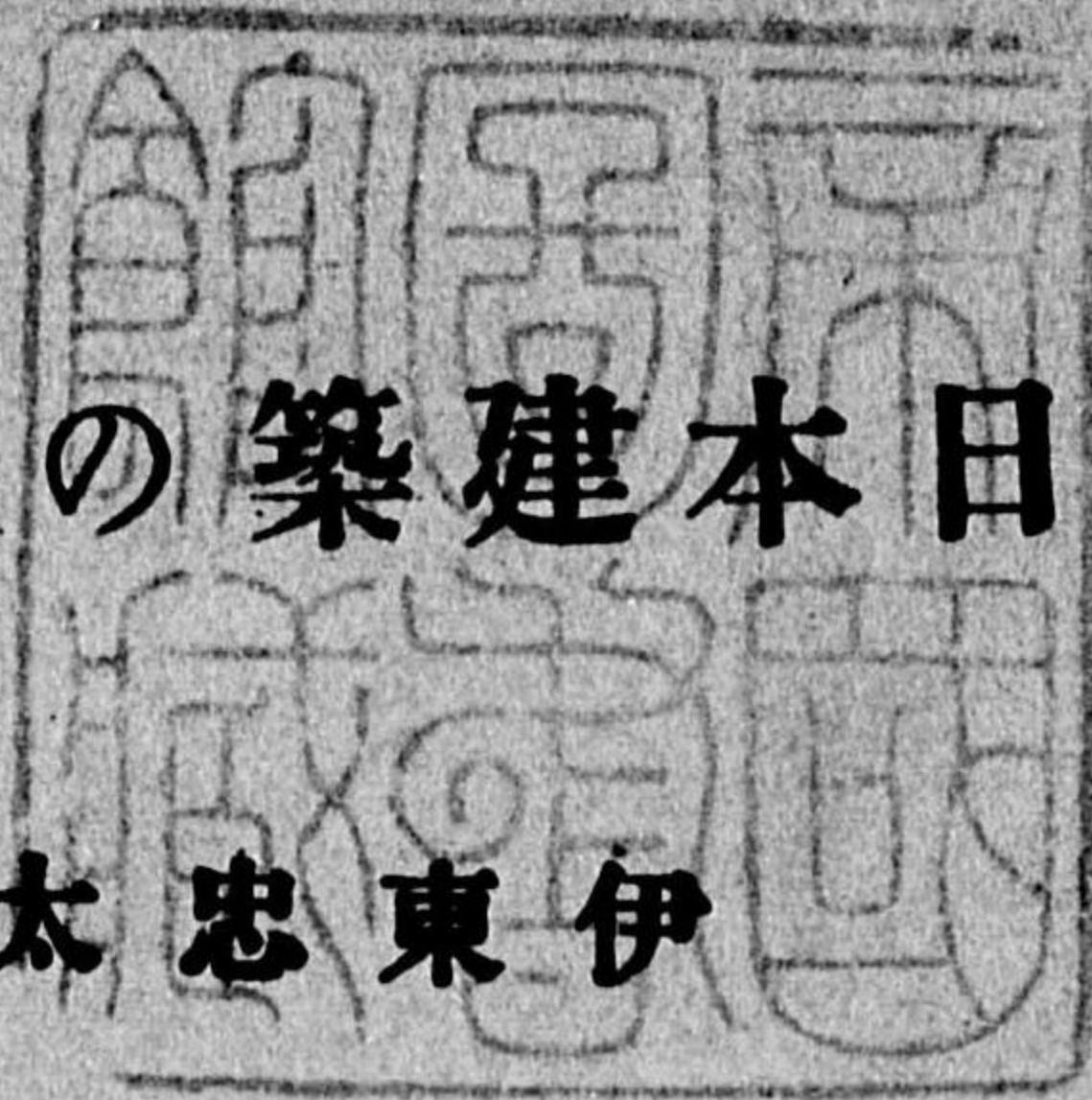
始



108 ✓

相實の築建本日

太忠東伊

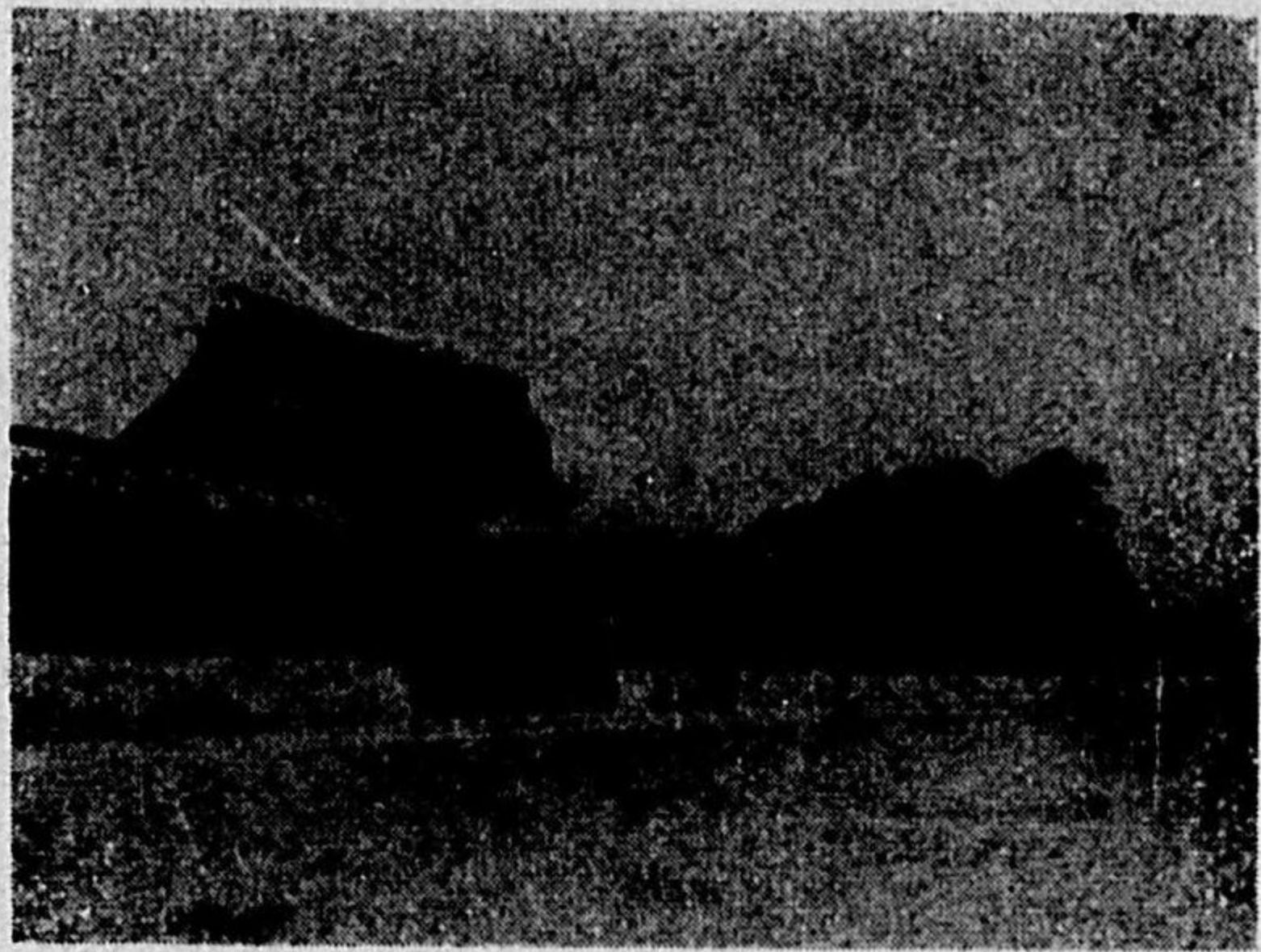


521
J. 89
2

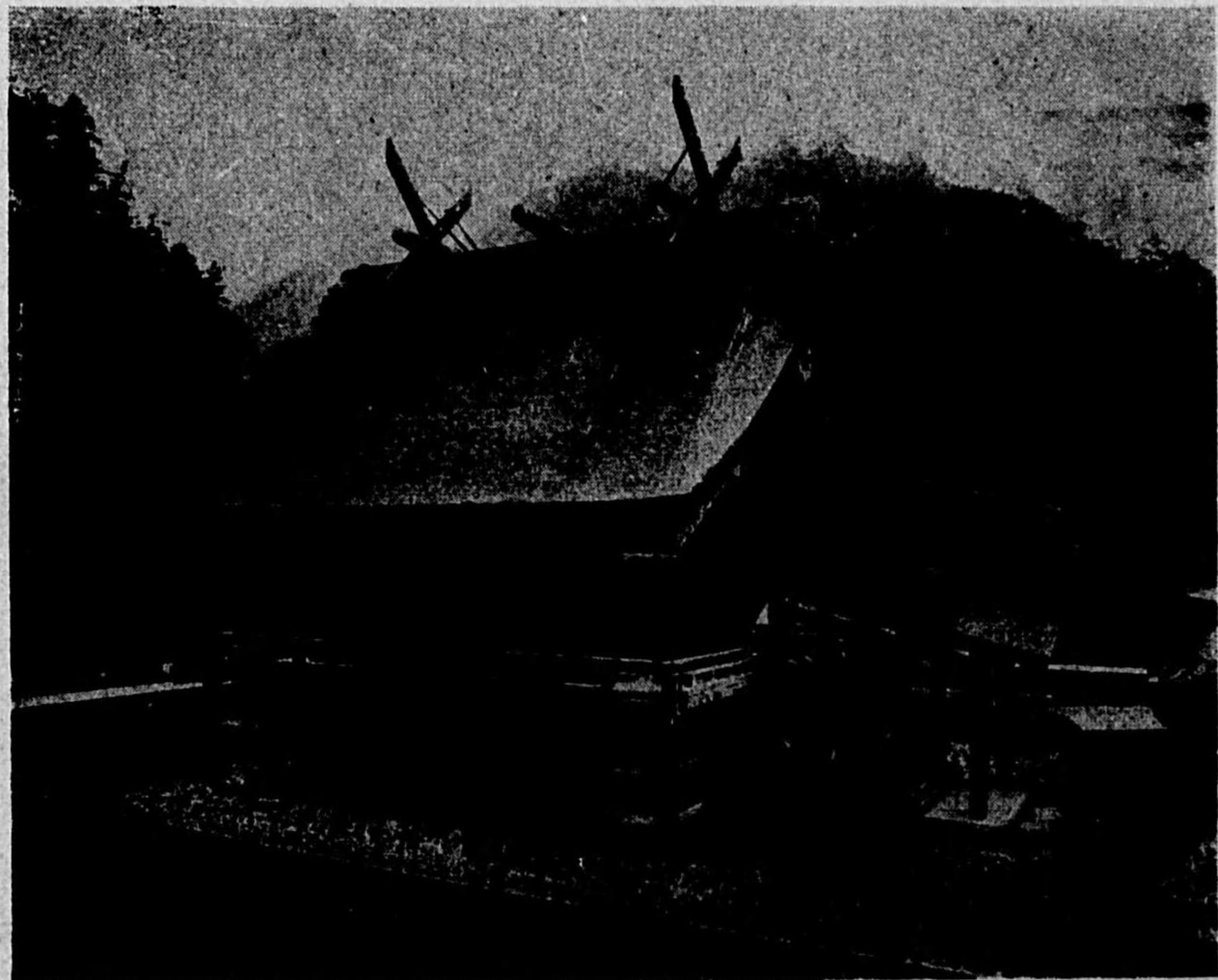


社陽太新





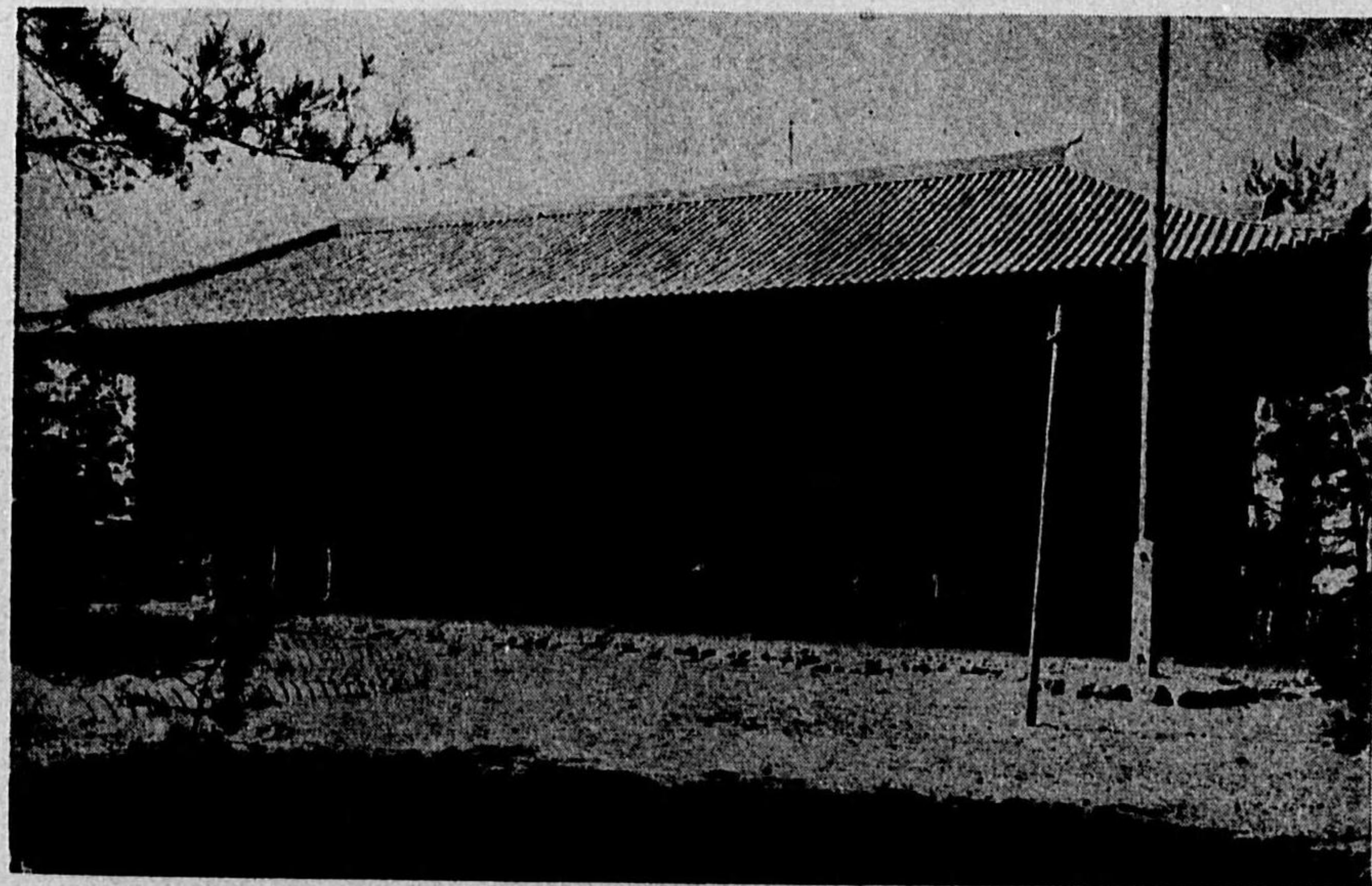
京都御所建春門



出雲大社本殿(大社造)



御鹽神社鹽燒所(天根元宮造)



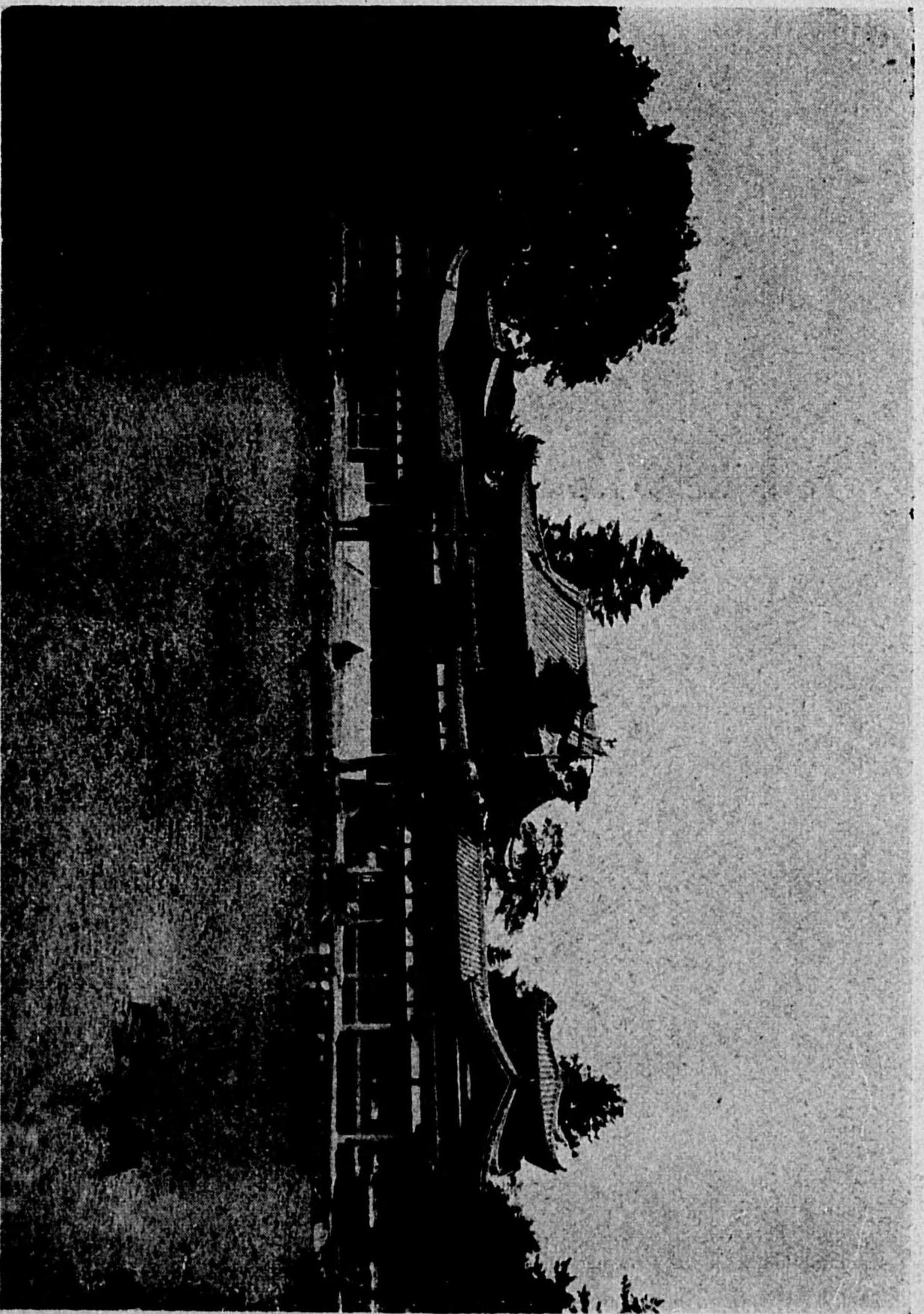
正倉院奈良東大寺內勅封藏(校倉造)



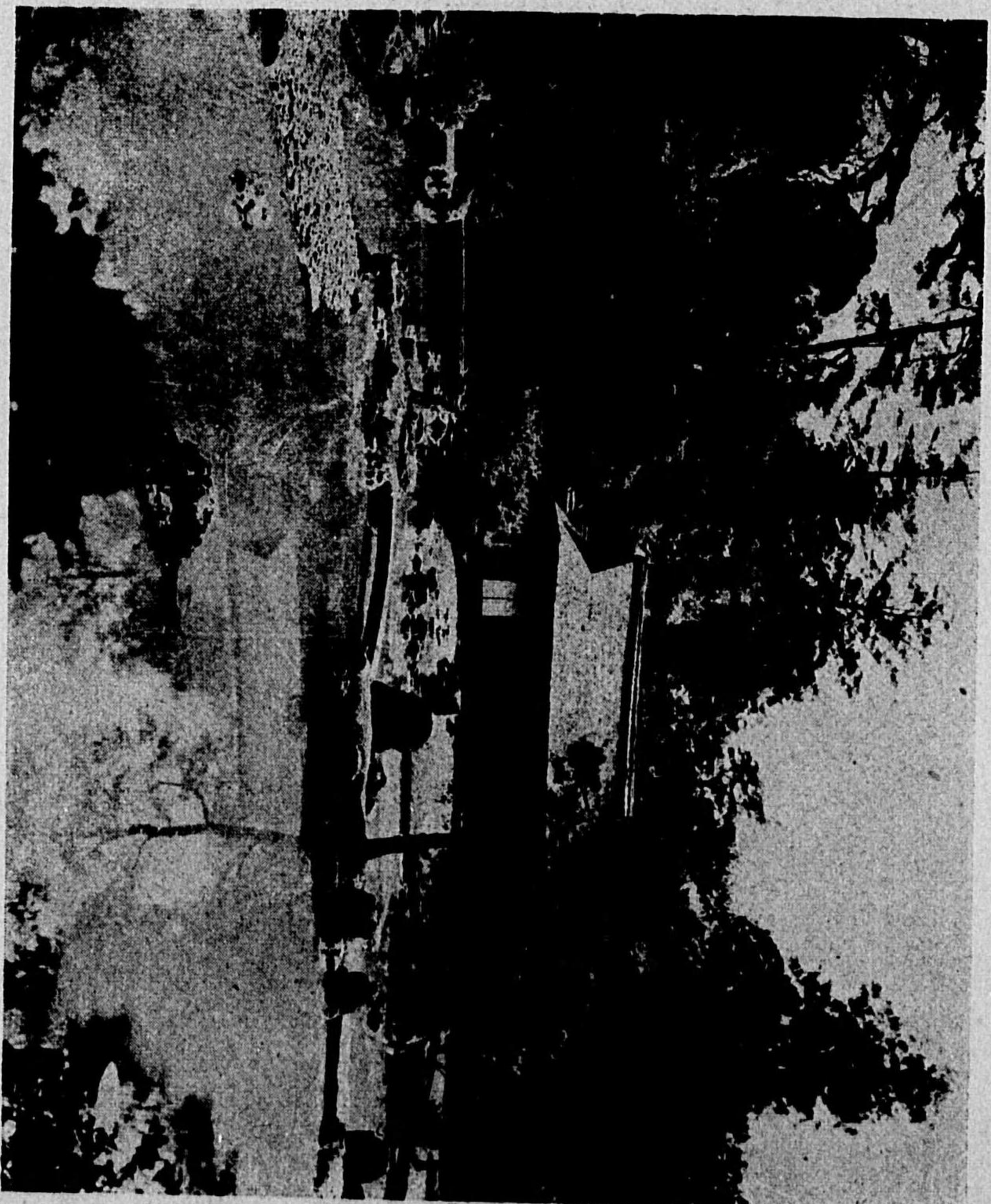
法隆寺東院夢殿



法隆寺伽藍



堂 風 鳳 院 等 平



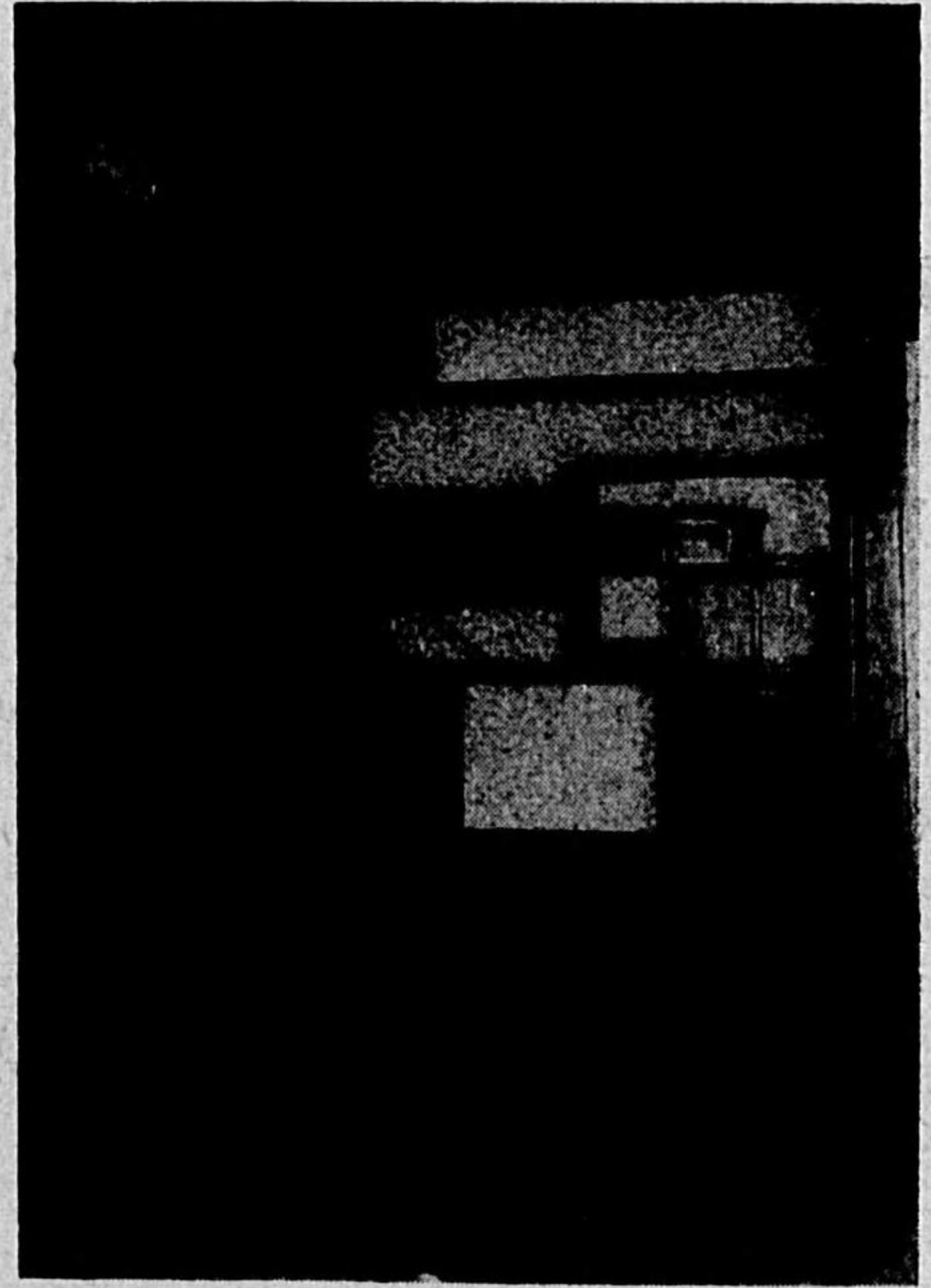
桂 離 宮



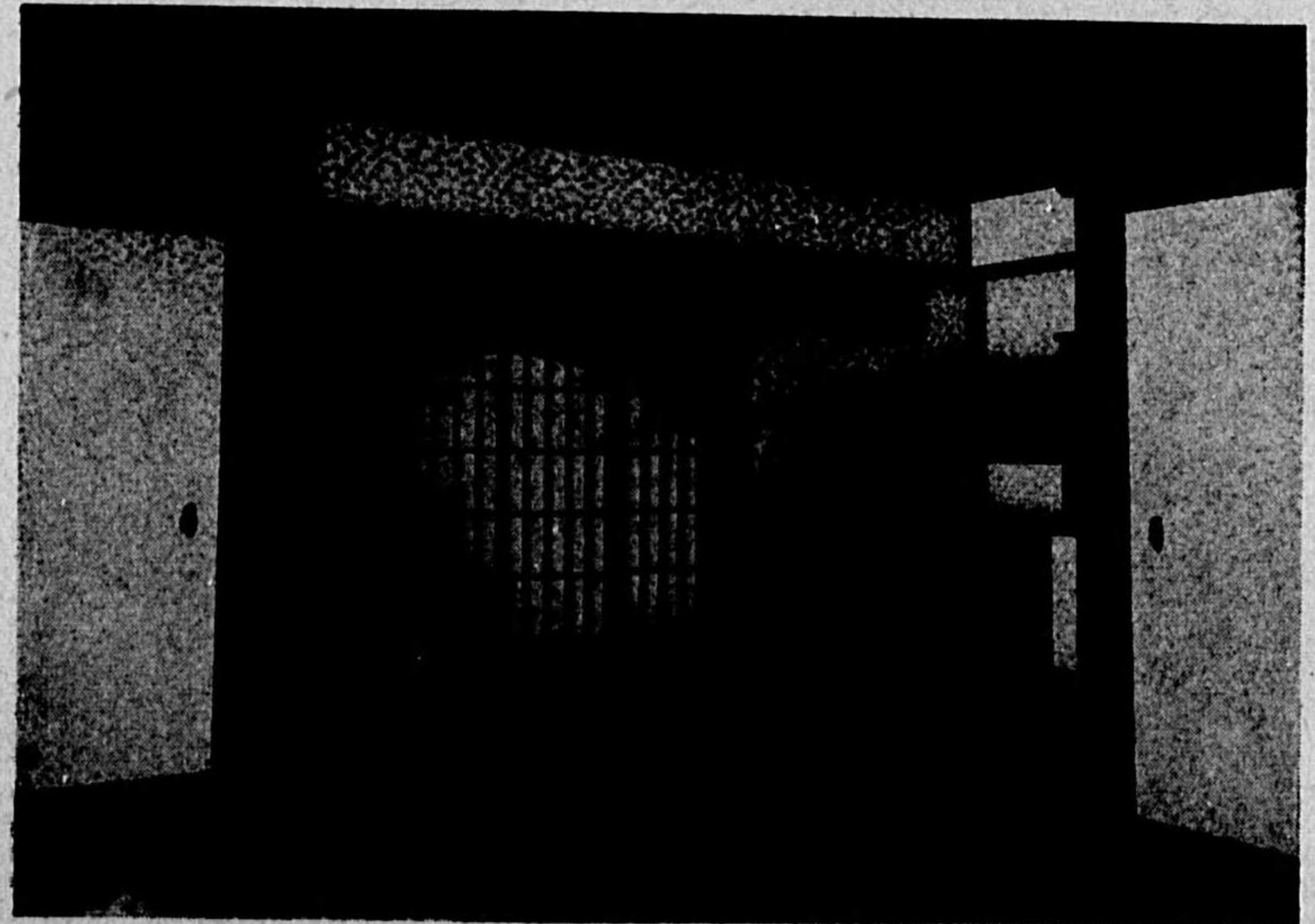
飛雲閣（聚樂遺構）



鹿苑院と金閣

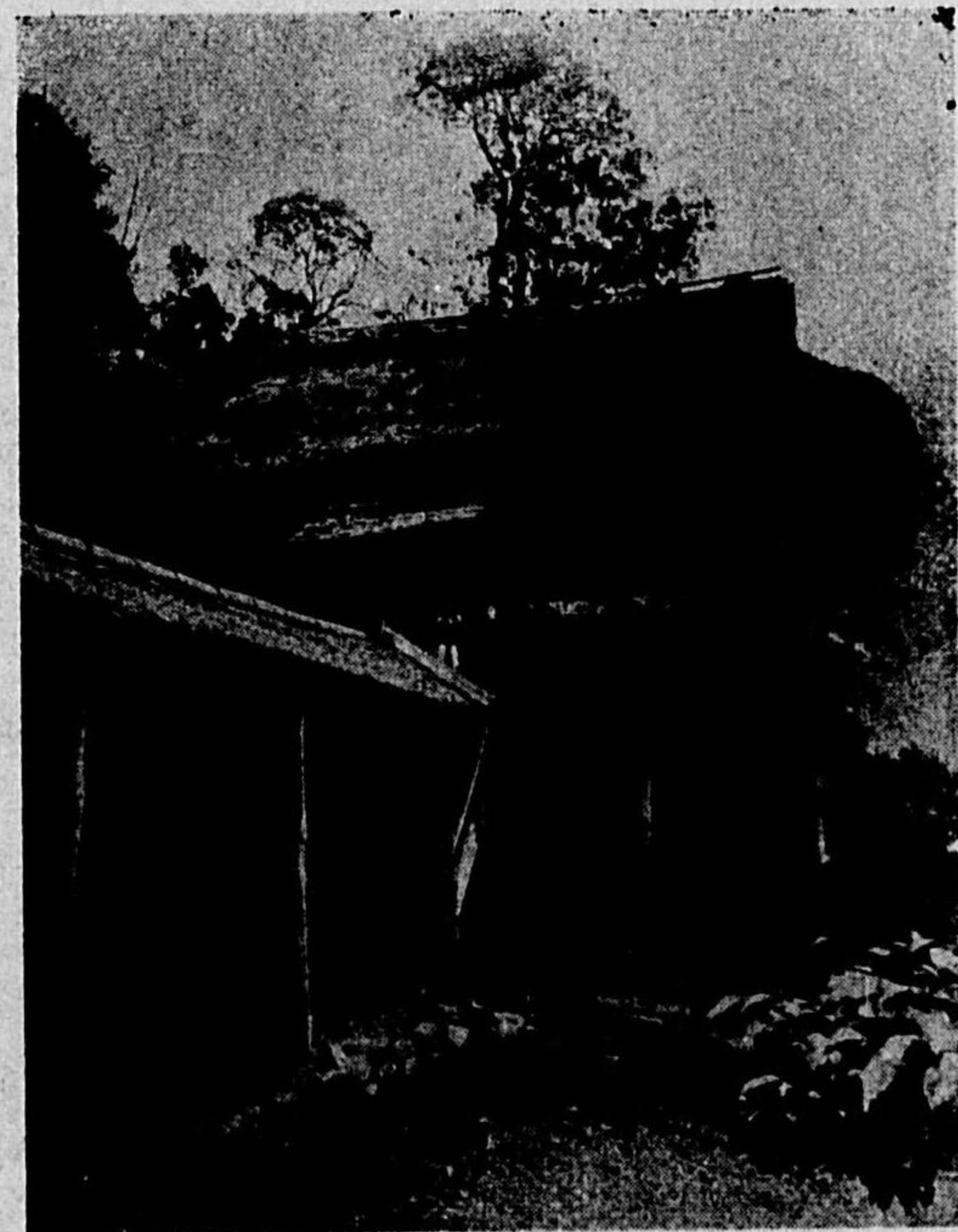


桂離宮新殿（上・下）

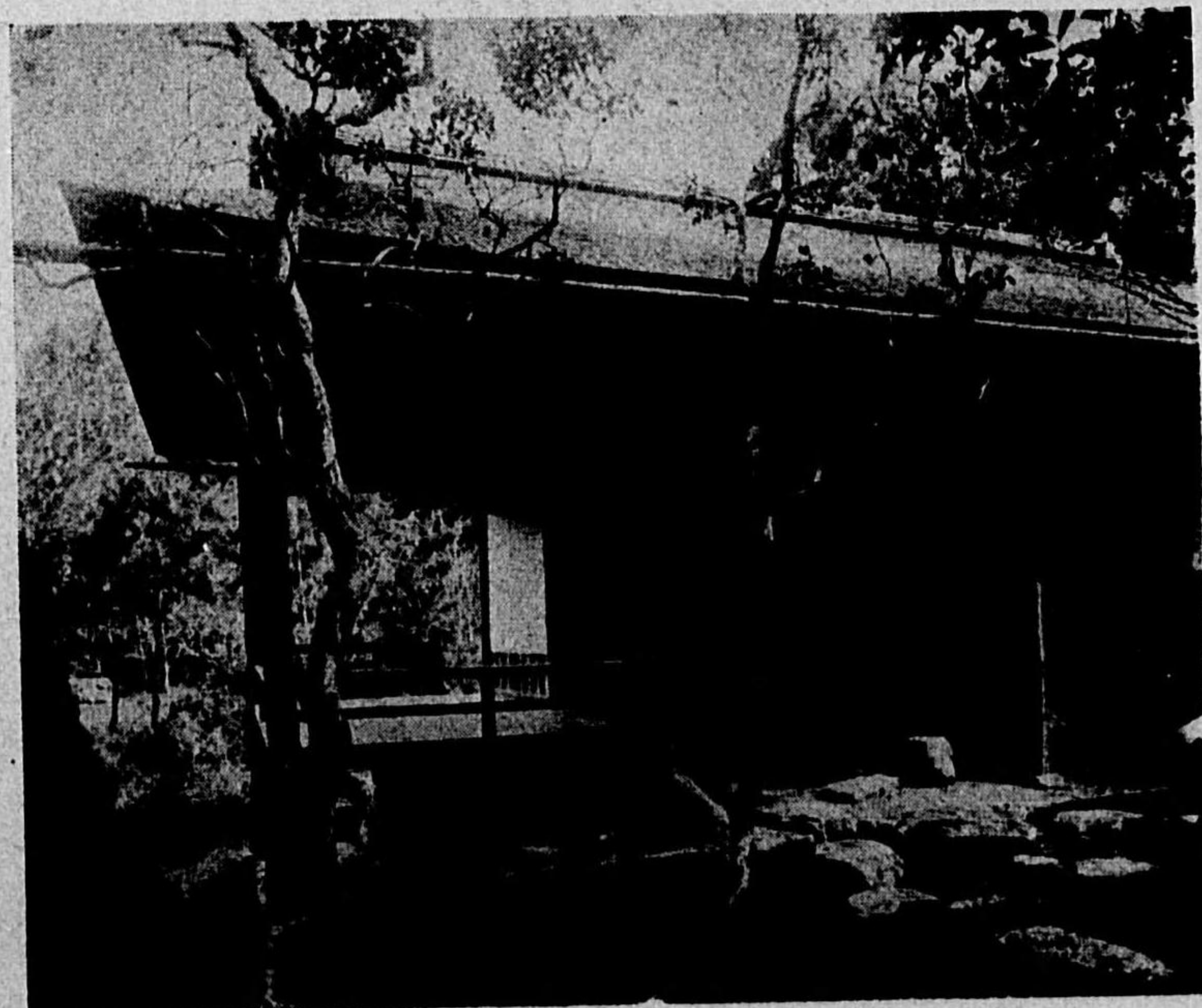




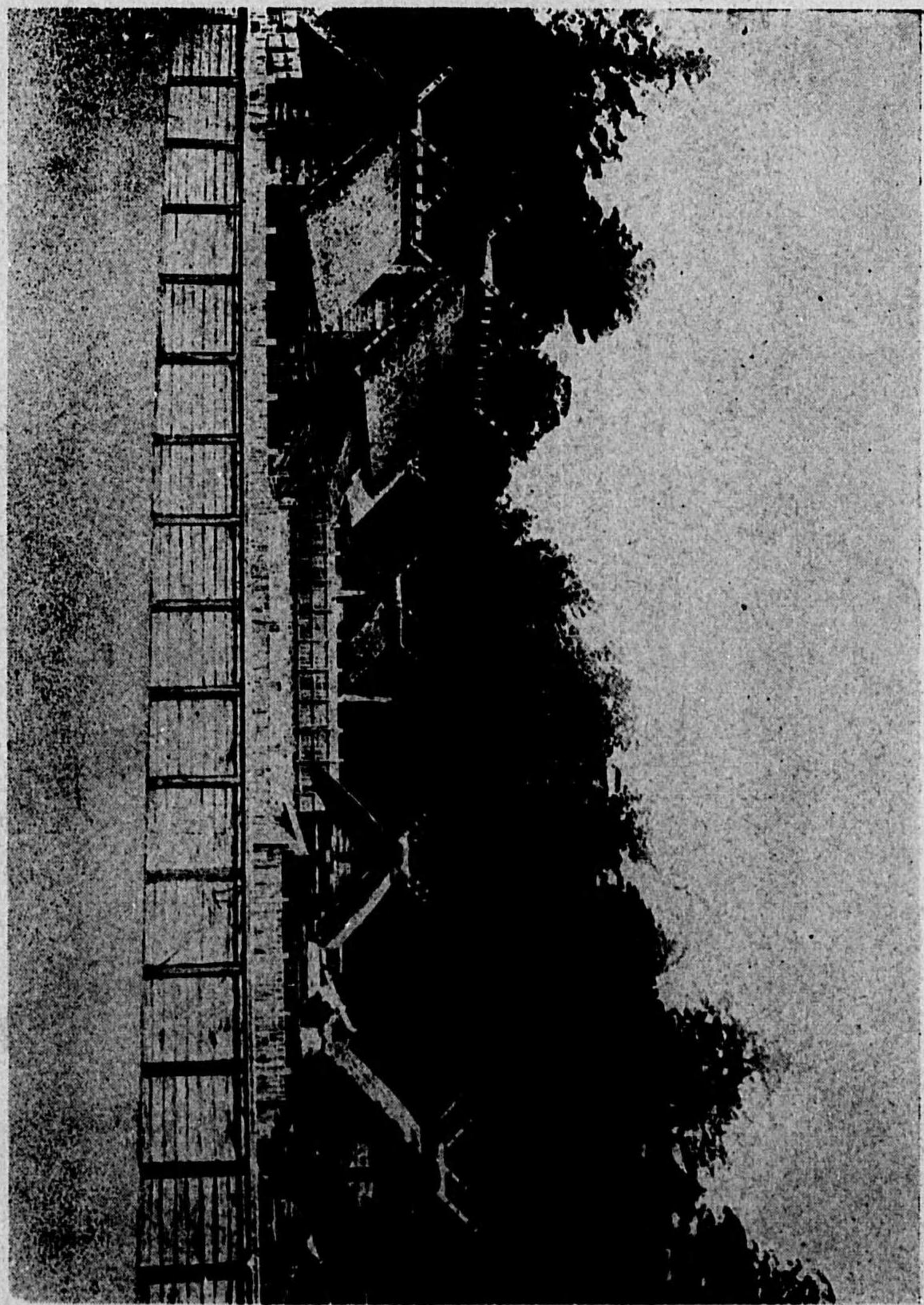
大傳法院大塔



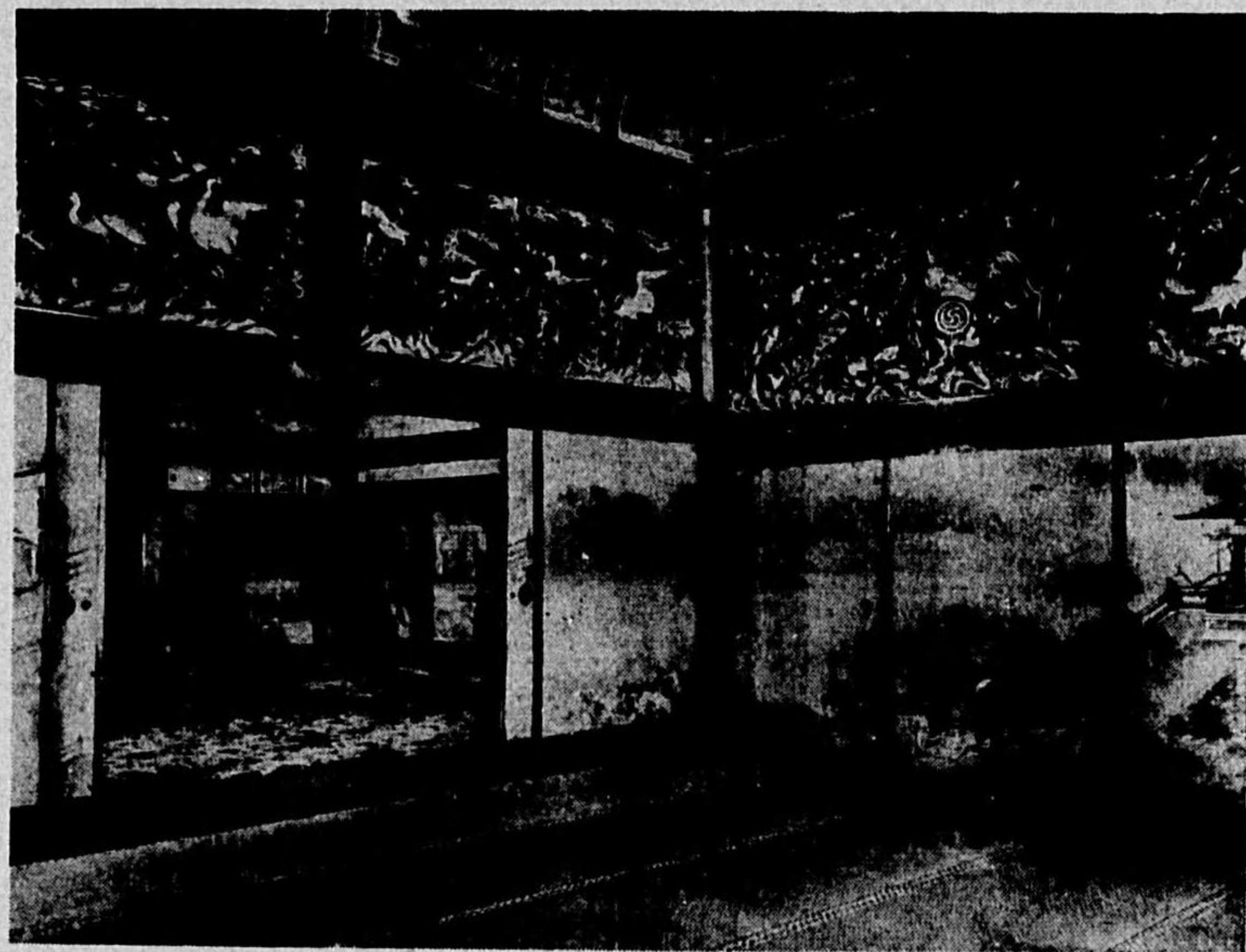
時雨亭 (現在京都高臺寺)



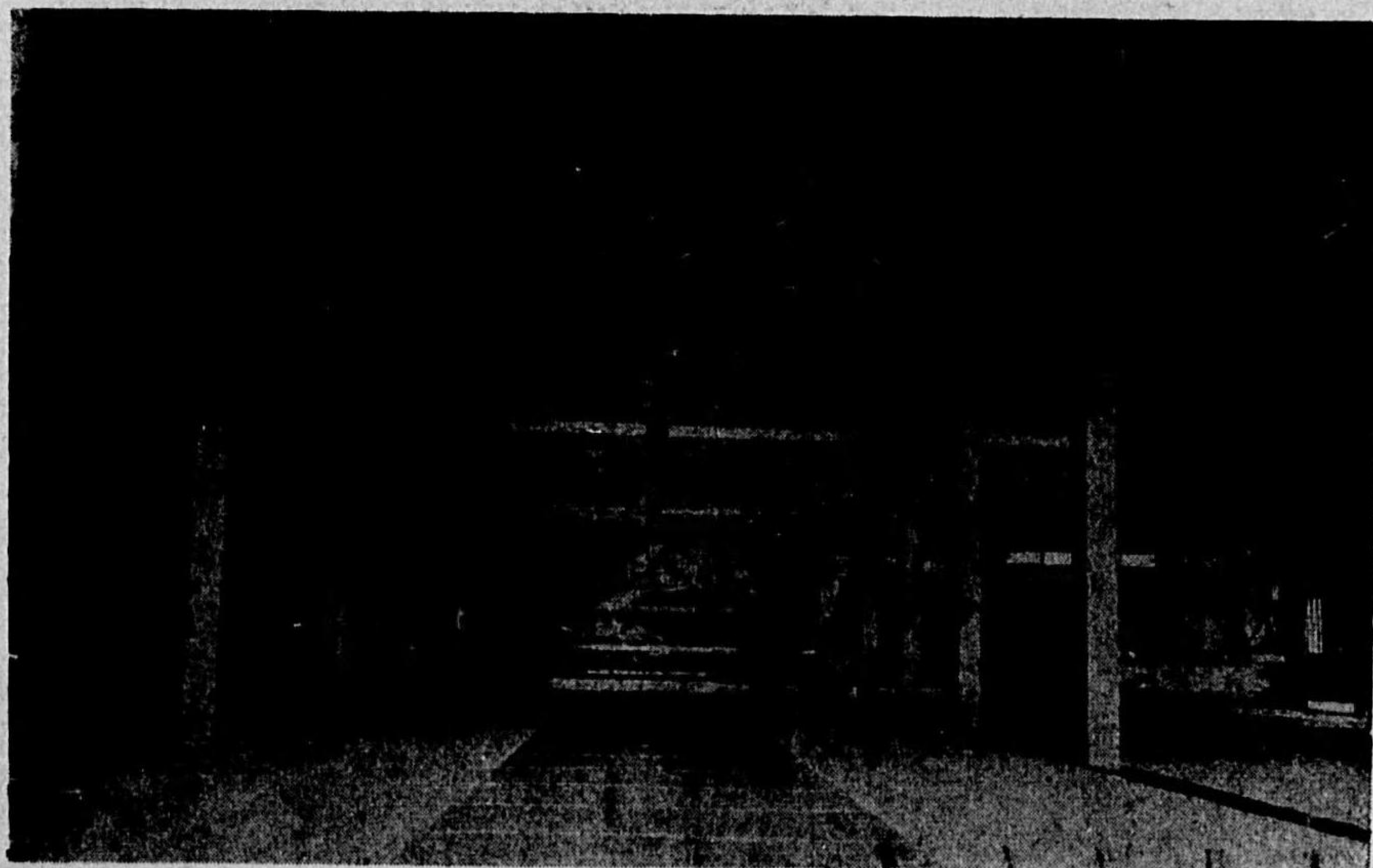
湘南亭



伊勢大皇神宮



名古屋城上洛殿一之間内部

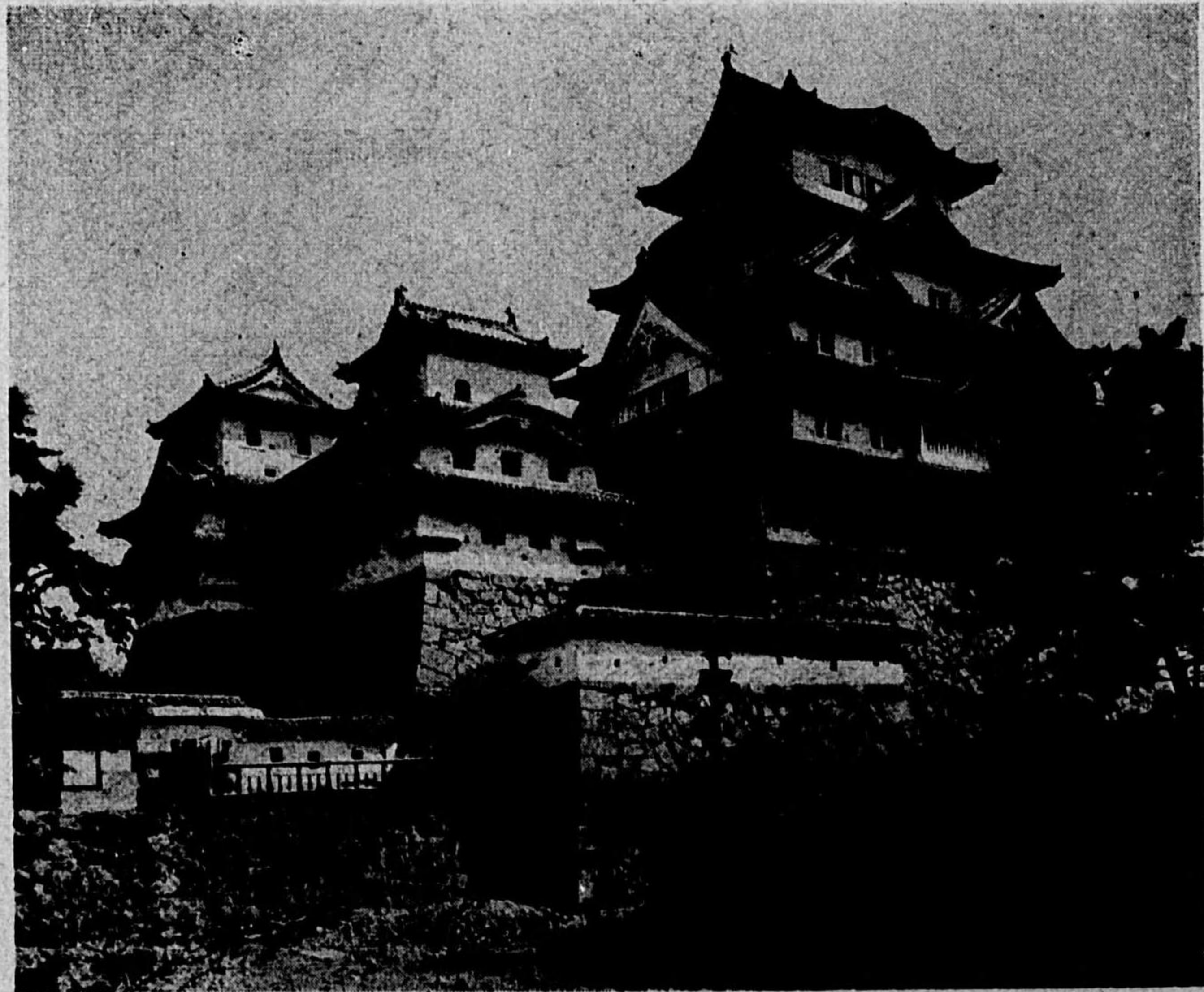


桃山遺構（現在京西本願寺）

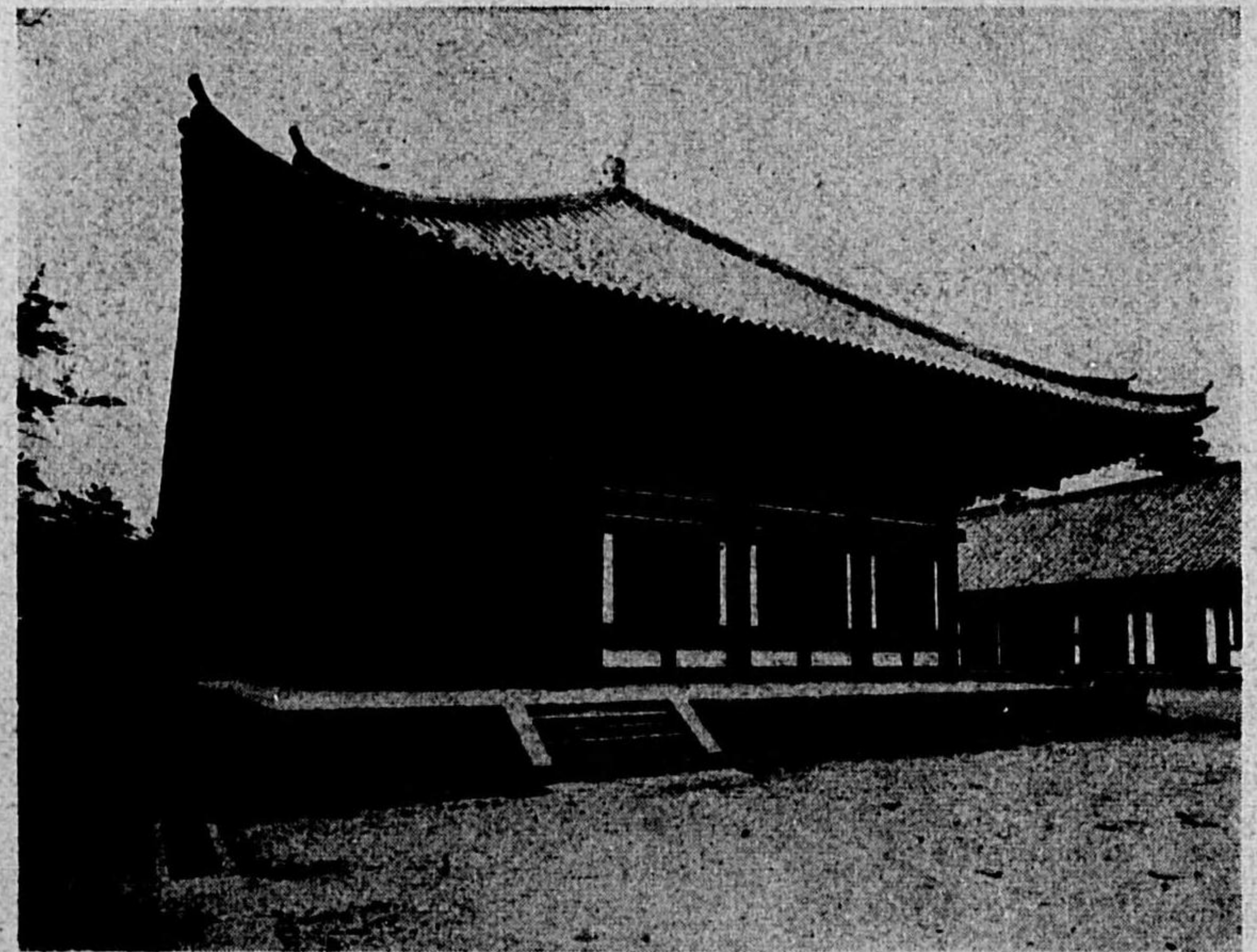


名古屋城天守

城路姫



薬師寺塔婆



堂金寺提招唐

1002
9

第一章 緒論

論

目次

第一節 古來日本建築に對する認識……………一

第二節 古來外人の觀たる日本建築……………二

第三節 覺醒の機到る……………一七

第二章 建築とは何ぞや……………三

第一節 建築の定義……………二五

○第二節 衣食住の住として……………二九

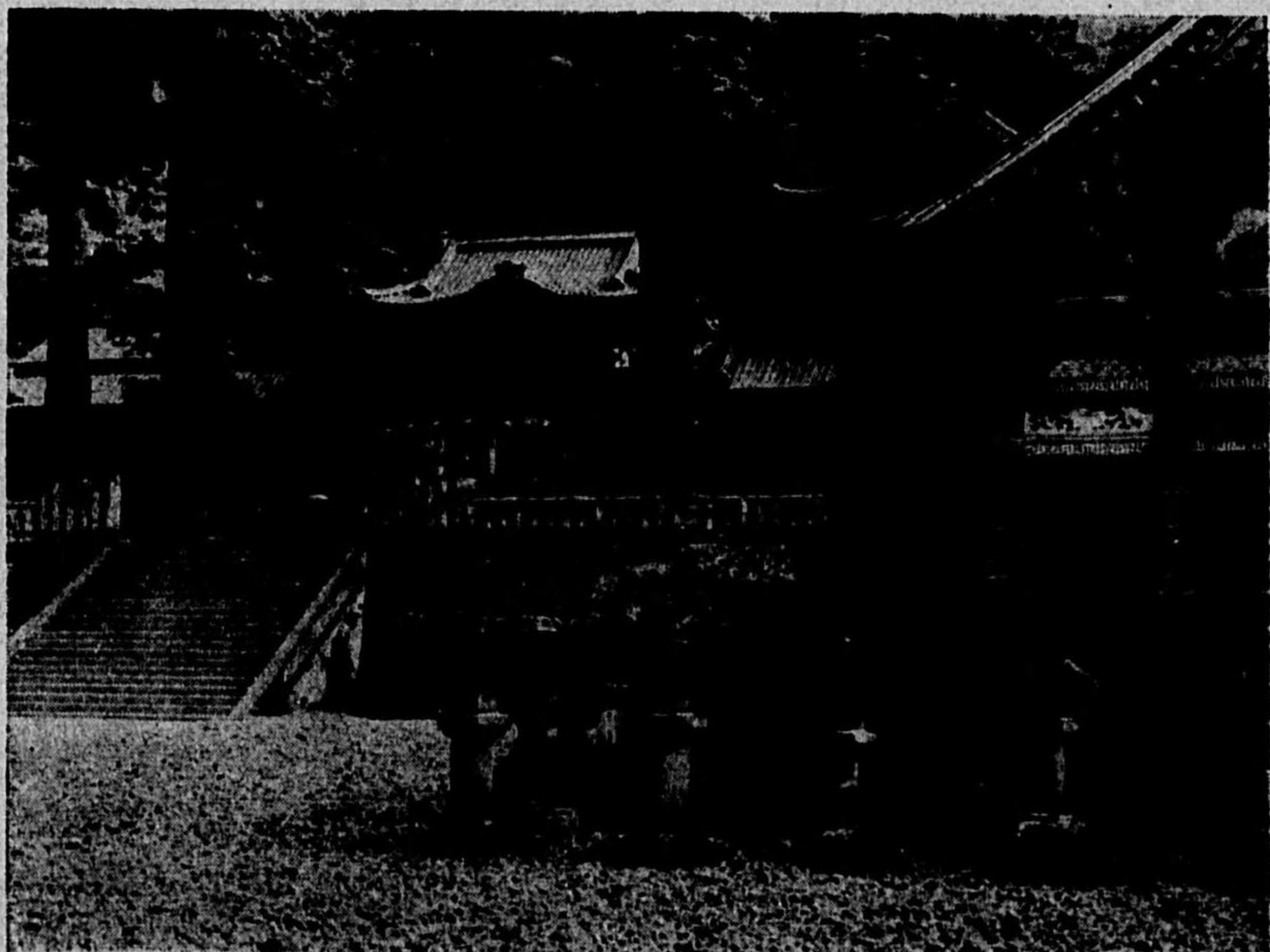
第三節 藝術の一科として……………三三

目次

一



東照宮唐門



(造現權) 門明陽宮照東

第四節 土木の一科として……………七七

第五節 學と藝、理と情、物と心……………八〇

第三章 日本建築とは何ぞや……………八三

第一節 日本人に適する日本の建築……………八七

第二節 日本建築の特異性……………九〇

第三節 東西建築の軒輦……………九五

第四節 外國建築の印象……………一〇〇

第四章 國土……………一〇三

第一節 土地の環境……………一〇五

第二節 氣候……………一〇七

第三節 天然資源……………一〇九

第五章 國民……………一一一

第一節 生活様式……………一一一

第二節 信仰……………一一七

第三節 趣味……………一二〇

第四節 技巧……………一二三

第五節 科學性……………一二六

第六章 日本家屋の標準……………一二九

第一節 平面計畫……………一三三

第二節 材料構造……………一三五

- 第三節 外観……………一〇八
- 第四節 内容……………一一〇
- 第五節 庭園……………一一三
- 第六節 日本建築の根本……………一二六
- 第七章 日本文化の三重相……………一九
- 第一節 日本建築の歴史……………三三
- 第二節 三期の共存共榮……………三六
- 第三節 世界無比の現象……………三九
- 第四節 明治以後の現象……………四四
- 第八章 純正日本建築の實例……………五九

- 第一節 古代の住家……………一四二
- 第二節 神社……………一四七
- 第三節 皇居……………一五七
- 第四節 佛寺……………一六〇
- 第五節 邸館、亭榭、茶室……………一七〇
- 第六節 城郭……………一八二
- 第七節 廟墓……………一八七
- 第九章 結論……………一九二
- 第一節 日本建築の再検討……………一九三
- 第二節 日本建築の世界に於ける立場……………一九五
- 第三節 東西建築の對比……………一九七



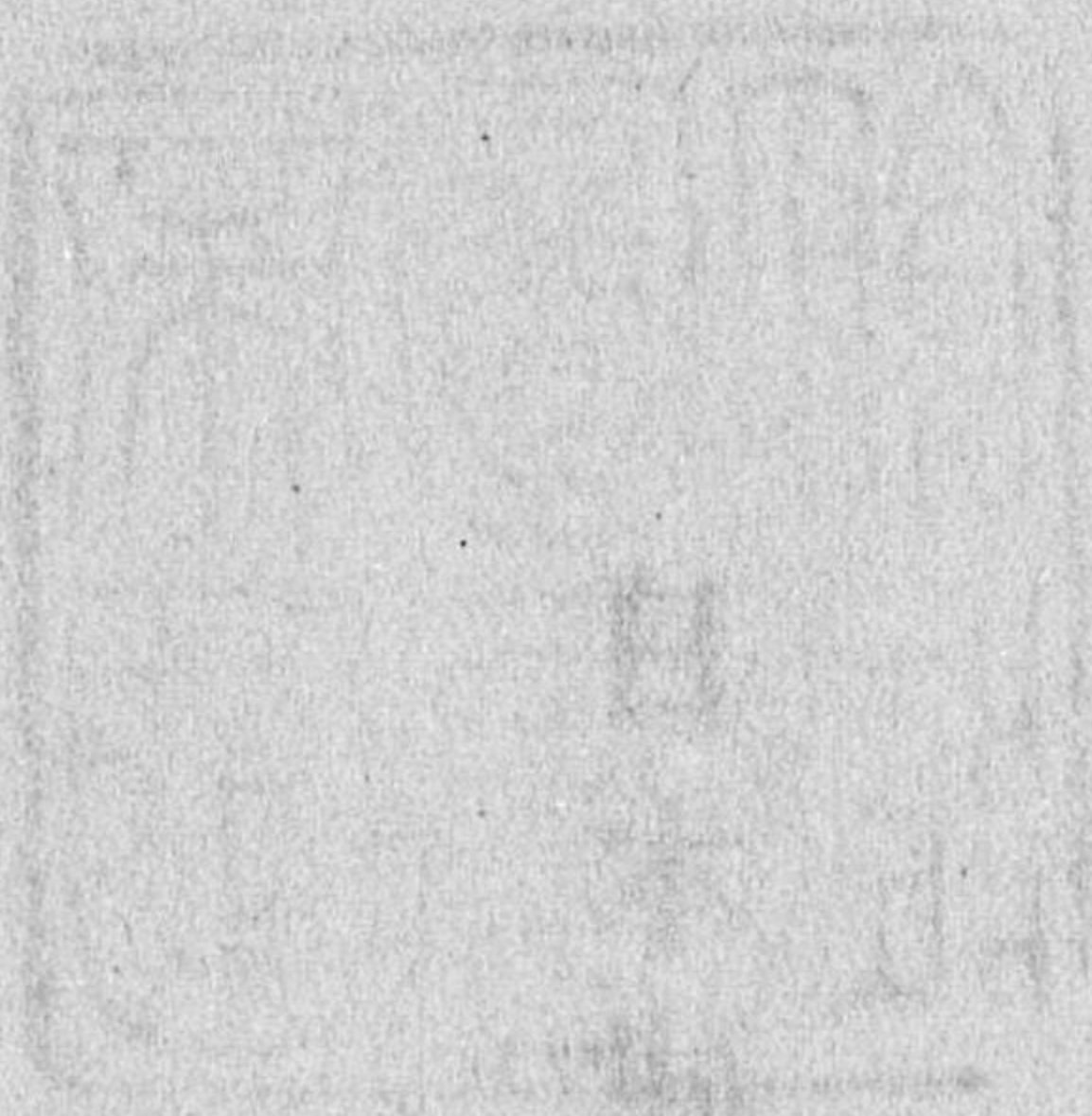
日本建築の實相

目次

六

第四節 將來の日本建築	101
第五節 南亞地方の建築に就て	107
第六節 結語	111

第一卷 終



日本書紀

第一節 古來日本建築に對する認識

凡そ世界の何れの國の民族にしても、開闢の初めに先づ衣食住を必要としたことは申すまでもない。その中住即ち、住宅建築の問題に就て考ふるに日本に於ても獨特の住家が既に神代に於て發祥してゐる。然らばその建築は如何なるものであつたか、如何なる家を造つたかと云ふことは具體的の證據となるべきものが存せず、専ら文献又は旁證に頼る以外に方法はないのである。

古事記には伊邪那岐、伊邪那美の二神の八尋殿の記事がある。それは如何なるものであつたか。即ち八尋は大きさを指したのか、或は殿の宏大なるを讃稱した言葉とも解せられるが、若しこの八尋殿が八尋の大きさの殿であつたと解

すれば、その時既に度量衡の制が出来てゐたと云ふことの證據である。度量衡は建築の根本であつて、我國に於ては開闢以來既に建築術が萌芽して居たことが明かである。

この時度量衡を制定し、官室の御造營を掌られたのは手置帆負命と彦狹知命の二神であり、この二神が番匠の神、今日で云ふ建築家であつたと云へる。手置帆負命は、尺度の單位を人體から考へ出し、先づ手を廣げた拇指と中指の距離、即ち今の約六寸を單位としたので手置の名を稱し、帆負は讚嘆の間投詞であつて、即ち手を以て尺度とした神の意であり、彦狹知命の彦は男子の通稱であり、狹は尺度、知は司で尺度を掌る神の意である。

その尺度は如何に單位を組織し之を運用されてゐたかと云へば、今の曲尺の約三寸が、握つた拳の大きさで、手を東ねた長さ即ち東である、十束の劔と言へば約三尺の劔である。この束の二倍が即ち六寸で一手になり、而してその十倍

即ち六尺が一尋である。竝に一尋の高さがあれば、日本人は頭が開えるようなこともなく、横に一尋の幅があれば両手を擴げて通ることも出来る。これに依つて六尺を以て單位としたと予は考へるのである。

この二神が作られた尺度を天量と云ひ、これによつて宮殿を御造營になり更に二神により、調度、器物、矛、盾、その他の工藝品が作られたのである。二神の子孫が神武天皇の橿原宮の御造營に當つたと云ふ傳記もあり、今日に至つても、宮殿、神社、佛寺等を造る時には、立柱式にしても上棟式にしても必ず彼の二柱の神を御祀りし、祝詞を上げることになつてゐるのである。

扱八尋殿は、八尋の名によつて八間の間口の宮殿が神代に於て出来たと考へられる。これは日本に於ては偶數の八の數を尊びて之を賞用し、支那では奇數の一、三、五、七、九を崇敬するのである。さて八尋殿の材料として木材が用ひられたのは云ふまでもない。木材と云つても、宮殿用の木材は必ず檜でなけ

ればならなかつた。この慣例が今日まで連綿として傳つてゐる。何故に檜が選ばれたかと云ふと、日本は世界第一流の大森林國であり、現代でも日本面積の百分の七十以上は樹木を以て蔽はれ、百分の四十以上は森林である。況や太古に於ては至る處樹木を以て掩はれ、何處にも檜は繁茂してゐたであらう。然かも檜は材木の王と謂はれ、世界無二の優材であつて、斷じて日本にのみ産するのである。アメリカで産する米檜などと云ふものがあるが、これは偽物で、全然正しい檜ではない。古事記にも「宮は檜を以て造る」と記されてゐる。

斯の如く世界無二の優良木材を建築に使用することが出来ることは、建築の進歩發達に著しい効果を奏した所以である。且つ又檜以外にも、杉、松、楡、榎、楓、樺等の針葉樹の適材が無數に繁茂してゐたのであるから、原始時代に於ては、これ等の木材の、しかも手近のものを以て宮殿神社以下の家までも造つたのであり、その結果は日本國民は木材と親しむこと甚だ深く、大抵の國

度什器雜具は木材に依て作らるゝので、即ち日本は木材文化の國と稱さるゝに至つたのである。彼の沙漠や荒野に彷徨する他の民族の、石及土の文化に誘導されたのと日を同くして談ずることは出来ぬ。

さて美しい檜造りの宮室神社等を築造する段になり、太古に於ては先づ檜を伐り出し、柱として地中に生け込むので、祝詞にも

「底つ磐根に宮柱ふとしき立て、高天原に千木高しりて」

とある如く、地を地山の磐石まで掘りぬき、その上に太い柱を立てるので、これ程堅牢な基礎はない。千木高しりてと特筆したのは、千木は一面に於て建築の威容を示し、一面に於て又形に天に聳え、千木いよ／＼高くしていよ／＼神聖なる高天原に近づくの信念が湧くからである。

一般の住宅建築は、神社宮殿などに較べれば、勿論程度は著しく低く、千木勝雄木の設備なども無いが、その構造の主義に於ては同様である。これが文化

の進歩と共に、外國の影響をも受けて進化し、形を變へて行くのであるが、根本的には些も變らずに今日に至つてゐる。元來植物性一式で家を造るといふ事が日本開闢以來の固有の純粹日本建築の法式で、三韓、支那との交渉以來、大陸文化の影響を受くる事が尠らずあつても、その多くは上流階級のものに屬し、農民の住宅等は、この影響を受くることは殆どなかつた。然し影響を受けたと云つても露骨な模倣ではなく、これを日本化したのであつて、根本をなす日本精神に於ては不動である。

其の後近世に至つて、亞細亞大陸より渡來した文化以外に、明治維新當時より歐羅巴の文化が流入し來り、日本建築は漸く複雑となつたのである。

日本建築は開闢以來幾千年、連綿として今日に繼承し來り、無數の重要なる建築を現出したのであるが、古來建築に對する國民の認識は餘りにも深からず、予はこの點に於て物足らず思ふのである。建築に關する文獻・傳説・口碑

等は、可なり豊富であるが、予の知らんと欲する所は、建築に對する表面的物質的の詮議でなく、内容的精神的の考査であり、即ち日本の文化・日本民族の本質を背景とする建築の吟味である。之を徹底的に検討することは非常な難問題であるが、是非共遂行せねばならぬ仕事である。

日本建築を完全に認識せしむる爲には、先づ既往に於て内國人が如何に建築を認識して居たか、外國人は日本の建築を如何に解釋して居たかを詮議して見る必要がある。凡そ總ての事物は悉く相對的である。甲が善と言ふは乙の惡との相對であり、丙が美と稱するのは丁が醜と認めるに相對するのである。即ち絶對の善惡美醜は考へられぬ譯であり、日本建築の場合に於て、日本民族が日本建築を善美として誇るとも外人が日本建築を評して醜惡と言ふならば、所謂「誰か鳥の雌雄を知らん」で、全く要領を得ない事になるであらう。

茲に於て、吾人は日本建築に關して、相對を打破して絶對に東西建築の雌雄

を明らかにして見たいと思ふのである。事は暴論の様でもあるが、我には我の信ずる所があり、彼の錯覺乃至誤解を覺醒せしむるの用意があるのである。それは順次に項を逐ふて説明するのであるが、兎に角日本人が日本建築を正しく認識するに非ざればこの問題は物にならぬのであり、同時に外人が日本建築を公明に知悉するに非ざれば對手とすることは出来ぬのである。然るに世界の情勢を通觀するに、兩者互に多大の錯覺を以て相見するの傾向があり、日本は外人に對して無意味に數歩を譲り、外人は日本に對して無法なる輕侮を加へるの風があるのは遺憾の至りである。凡そ、人自ら己れを輕んじて然る後人に輕んぜらる。日本人が外人に輕侮さるゝは、勿論外人の無知と横暴に由るも、亦た既往に於て日本人が不必要に外人に諂諛を與へたるが爲でもあると思ふ。第二節に於て之に關する實例を擧ぐるのである。

第二節 古來外人の觀たる日本建築

古代に於いて外人が如何に日本建築を觀たであらうかの消息は不明である。近古桃山時代に天主教の牧師等が、日本建築を物珍らしげに見た記録などはあるが問題とするには足らぬ。元來外人の日本建築觀は呆れる程見當違ひのものであつて、古い時代のことはさて置き、江戸時代よりの外人の批評の多くは、見え透いた阿諛を弄するか、或は亦た皮肉な輕侮をあびせるかである。この一例を擧げるならば、慶長十四年、この頃はまだ基督教徒追放以前のこと、宣教師が日本に往來して居た時であつたが、偶々來朝したメキシコのヴィスカイノ等は、その以前に來朝してゐた宣教師ソテロの案内により、伊達政宗を訪う

て松島の瑞巖寺に會見した時、ヴィスカイノは寺の金碧燦爛たるを見て故意に之を絶讃し、「これは自分の郷里マドリツドの宮殿エスコリアルにも劣らぬ」と云つた。この宮殿は世界第一流に位する大建築で莊嚴華麗を竭したものである。規模から言つても瑞巖寺の何千倍もあり、瑞巖寺と比すべき性質のものでない。彼は斯かる諛辭を弄して日本建築を愚弄したのである。

斯くして明治維新前後の頃より英米等の一知半解の徒が來朝し、盛に日本建築を酷評したのである。彼等は日本民族を未開の低劣なる蠻族と認め、何事によらず片端から貶黜したのであるが、建築に關しては「日本の家は未開人の小屋である。薄つべらな板と紙で造るのであるから、お話しにならぬ、マツチ一本で多愛なく焼けてしまふ。即ち建築と呼ぶ資格はない。建築とは石や煉瓦で堅牢に築き上げ、火にも水にも耐へるもので、之を設計し監督する者はアーキテクトと稱する學者兼技術家である。日本の家は、大工といふ低級なる職人が

施工するのであつて問題にならぬ。」などと罵詈訾嘲したのである。

當時歐米を崇拜し、歐米人の言ふ事なら何でも正しいと合點してゐた日本人は、之を聞いて實にもと信じ、古來の日本建築を弊履の如くに遇して只管歐米風の建築を尊崇した。末松謙澄男の如きはこの代表的な存在であつたと云へる。彼は伊藤博文公の女婿であるが、非常な英國崇拜者であり、長い間歐米に居り歸朝するやその評論に於て盛に日本文化の酷評を試みたのである。予は直接之を聽く機會があつたが、彼の所説は、日本の藝術、即ち文藝にせよ造型藝術にせよ總て片端しから否定し攻撃したのであつた。例えば歌舞伎の所作は滑稽にして不自然であり、蠻風の域を脱しないと罵倒し、音樂に對しても西洋には學理的に研究した音階があり總てこれに従つて規則正しく彈奏するが、日本の音樂は音符にかゝらず、これを手加減で出鱈目にやるのだと難じ、繪畫に就しても、日本にはペーティングはなく、所謂日本畫はドローイングがデッサ

ンに過ぎず、遠近法も寫實もない歐羅巴の繪畫ペインティングに較べれば、日本畫は實に原始的な低級なものであると斷じた。これは一例であるが、斯の如くに日本文化を輕蔑し、之を宣傳したのは實に日本人自らであつたことを忘れてはならぬ。斯くして明治五、六年頃には銀座通りに煉瓦造りの家が並び、新橋驛を石造にするなど、漸次歐羅巴風の建築が出来た。又日本にも工部大學校が出来てその中に造家學科が設けられ、英人の教師が招聘されて英國建築を教へられた。

斯かる風潮は獨り藝術のみではなく、社會萬般に亘つて猛威を揮つた。その一例を擧ぐれば、日本人の肌膚が黄色で、身長が低く、容貌體格の見すばらしいのは米飯と菜葉で生きて居るからである。若し歐米人の如くパン・牛肉・牛乳に轉向するならば、日本人の風采は必ず歐米人の如くに進化すべしと考へた一派が現はれ、更に進んで人種改良論が現はれ、歐米人との雜婚に由て將來日本人の血を滅し、日本人をして完全に金髮碧眼たらしむべしと唱へたのである。

る。別に又、日本語は英語の文法に副はずして甚だ不便且つ不合理なるが故に速かに日本語を廢し、英語を以て日本語とすべしと強調した者が現はれたが、その人は時の文部大臣森有禮であつたことを顧みて、慄然として恐れざる者は無いであらう。

斯かる時代に日本建築などが顧みられる様な筈はなく、その上廢佛毀釋として神社に屬する佛敎的の物件は容赦なく廢壞され、單獨の佛寺佛塔等がその餘災を被つて湮滅したのも多數を算するのである。洵に明治初年は日本建築の破壊時代を現出したのである。その顯著な例を述べれば、明治五年、奈良縣知事の計畫として、興福寺の境内の堂塔を取拂つて平地とし、これを羊牧場に轉用することが提案された。この時縣廳から數名の土木請負者を集め、興福寺内の堂塔取拂事業を入札に付したが、爰に一大事件は興福寺の五重塔の始末である。現在の塔は室町時代初期の應永年間の再建で、高さ十七丈、即ち京都の東

寺に次ぐ日本第二の高塔であり、威風堂々として奈良平野の全部を睥睨するの概がある。この塔を取り解いて始末をつける事は非常なる難事であり、その費用が幾何に上るかは見當もつかぬ筈である。請負者は多く逡巡した中の一札に五重塔の代金六百八拾圓とある。吏員が六百八拾圓は如何なる根據から出たかを問ふた、答へは、あの巨大な塔を丁寧に取り解くには何萬といふ額になる。因て一舉に塔を焼却し、焼却費と残つた銅鐵屑代とを計算して六百八拾圓を要求したといふのであつた。當局は之を是認したが、之を聞いた附近の市民が承知しない。それはあの巨塔が炎焼したら附近の家屋、或は奈良全市が丸焼になるやも計られぬとの抗議で、巨塔焼却は取り消され、國寶中の國寶たる靈塔は今や千餘年の故地に肅然として君臨し、幾萬の奈良市民は勿論、全國民の仰讃を享けてゐるのである。

蓋し外人が自國の建築を最優なりと妄信するは驕慢無知の蠻族の通性として已むを得ぬが、彼等が日本建築の真相を解せず、只だその材料構造の皮相のみを見て、その深き根底をなす日本建築の精神を見ることが出来なかつたので、彼等が今に至るまで漫然「蠻族日本」「非文化日本」を唱へて世界に喧傳しつゝあるは頗る心外の事である。吾人は之を默過することが出来ぬのである。但し斯かる混沌たる風潮の中に於ても、日本國民中には具眼の士少からず、外人の妄論に妄從せず、日本固有の建築に就ても、その優良性を唱へその保存を圖つた人もあつたが、大聲俚耳に入らず、可惜古代の名建築を蹂躪し、往々之を破棄し又は破棄せんとしたのであつた。

第三節 覺醒の機到る

前述の如く、明治初年に於て來朝せる外人は概ね日本建築を冷罵し、日本人の多くは亦之に盲從したのであるが、具眼の士も相當にあつた。私の特に親しくしてゐた岡倉覺三（天心）氏等は最も日本建築を理解した人の一人である。彼の日本文化・殊に日本藝術觀はアメリカのフェノロサに負ふところが多かつた。フェノロサは、日本建築美術の優秀さを觀破し、夙にこれを宣傳したのであつて、他の多くの外人と質を異にした一人である。

しかし日本建築の優秀さを認めるにしても、まだそれは多く骨董的な意味であつて、眞の日本建築は理解されるに到らなかつた。明治二十七八年の日清戦争の結果、日本は一躍して世界の舞臺に登場し、三十七八年の日露戦争の成果に由て再躍して世界の強大國に列した。かくして日本民族は覺醒したのである。日本國民は茲に人を知り己を知り、日本固有の文化の樹立に邁進すると同時に、日本古代の文化、建築も亦たその一科として研究さるゝに至つたのは洵

に慶賀に堪えぬ次第である。

斯くして第一世界大戦を経、今又第二世界大戦に逢ひ、世界最大強國と雌雄を争ふに至り、今日に於ては總ての點に於て、日本の勝算歴々たるものありとせらる。建築に於ても亦然り、一般國民は既に建築の概念を會得し、外國建築に阿附追從するを屑しとせず、日本肇國の古に還り、日本文化の根本に溯り、日本的建築の實相を知らんと欲するもの漸く多きを加ふるが如きは吾人の歡喜に堪へざる處である。

即ち久しく歐米建築の爲に抑壓され、一般社會よりも多く認識せられざりし日本建築が、漸く今日の機運に遭遇したのである。然るに日本建築が天地開闢より始まつて今日に至りたる意義深くも亦た尊重さるべき一大文化たるに係らず、又衣食住の一部として國民の生活に缺くべからざる使命を有するに係らず、更に又歐米人の所謂建築彫刻繪畫の三美術の一として國民に適快・慰安・

歡樂の情を與ふる義務を負ふに係らず、建築が比較的博く認識されざるに似て居ると思はるゝは何故であらうか。

予の考ふる所は、建築は衣食住の住に當ると稱するが、それは適切ではないと思ふ。衣食は随時に變更し、随時に買ひ、容器の中に藏し、頻繁に贈答に供する等極めて些細の問題に入るが、住即ち建築は大に之と異なる。建築は簡単に衣食の如く随時に移動、變更、賣買、封藏等の利便が無く、加之建築は天空を背景とし地上に屹立し、住者を保護する爲には、震火水災より風災電災等に備ふるの責務を有し、而して尙ほ且つ住者に慰安と適快と保健の責を負はねばならぬ。衣食と住とを同列に伍することなどは無理であるが、例之ば食は直接に人の生命を擔當するもので、その責任は最も大であり、食料の成分、營養價等々の研究を悉すことは、住の材料構造、平面計畫、外觀等に苦心するのと同様である。即ち衣食住は互に兄弟の關係があると言ふが、住は長兄にして父の

權を有し、衣食はその弟として兄の懷に抱かれてゐるものと見える。

西洋では昔から彫刻、繪畫、建築の三藝術を三姉妹に擬して居るが、これは殆ど日本には通用しない。これは明治初年後、英、佛、伊等から輸入したものであるが、當時の日本人は一も二もなく之に雷同し、得意で「藝術の三姉妹」を唱へ、その情力は今日になほ榮えてゐる。元來西歐、例えは太古の希臘・羅馬等に於て白大理石を以て神殿を造る場合、絶対に缺くべからざるものは神殿の外壁畫に施すべき神像の薄肉刻であり、殿内には丸彫の本尊その他の神々の像が必要であり、その神像が全裸體又は半裸體が多いことを注目せねばならぬ。而して、當時既に又壁畫が相當に發達して居たので、建築・彫刻・繪畫は太古から不可分であつたが、今日は最早三姉妹の縁は絶たれた。今日の建築には彫刻も繪畫も絶対必要ではない。例えは寺には本尊佛は勿論、その他の佛像畫像を必須とするが、夫は佛寺の什物であり、建築彫刻、繪畫を姉妹と見る理

由に乏しい。

要するに建築は建築である。彫刻・繪畫とは姉妹の関係はないが彼女等の叔父位の縁はある。建築が衣・食を弟とし、彫刻・繪畫を姪として互に相親むは洵に結構であるが、建築には建築の重大なる職務がある。この本職を怠ることは大なる罪惡である。今や一般國民は略ぼ建築の意を認識された筈である。この機を逸せず益々認識を深められんことを希望するのである。

第二章 建築とは何ぞや

第一節 建築の定義

前章日本建築に就て、發端の意味で、斷片的記述を試みたが、本章に入て建築とは如何なるものであるかを確實に説明するのである。日本建築の實相を極めんとするには、先づ建築の定義を考へなければならぬ。しかも凡そものの定義といふは、數言にして盡すべからざる困難なものである。

歐羅巴に於ては、古くより建築の定義に似たものがあつた。ローマのヴィトルヴィウスが、建築の要素を列記してゐるが、これは未だ定義を明確にしたものではない。今日で云ふ定義ではないのである。その後建築の定義を發表した者は予が知つてゐるだけでも十數あり、各自主觀的に意見を述べては居るが、

何れも完全を去ること遠く、今日之を批判する要は殆どないのである。十九世紀の終りに歐羅巴の建築界は行き詰り、新建築の創見に邁進し、その主義主張を發表したものは少くなかつたが、これ亦た定義の體を爲さず、例えば佛蘭西のコルビュジエが「建築は人を住はせる爲の機械なり」と云つたが、それは文字通りに解釋すべきでなく、一種の舞文とも見られ、之を以て建築の定義なりとするのは早計である。然るに日本の一派の人は彼を狂的に禮讚し、建築を一種特殊の機械と認め「機械はその物の能率を發揮すれば足る。形の美の如きは問ふ所に非ず、即ち建築を藝術視するは誤りなり」と考へたのである。これはコルビュジエの口先きの言葉を了解したので、腹の中の意味を履き違へたのであり、その揚句建築無裝飾論等が現れたりしたもので、實に誤れるの甚しきものである。

予は建築の完全なる定義を下すことの極めて困難なるを覺ゆるものである。

建築の如き複雑多岐なるものを數言を以て定義せんとするのは到底不可能で、強て之を言はんとすれば「建築とは人を住はせ、又は收容する爲に、地上に構築せるものなり、但若干の除外例あり」と云ふの外は無しと思ふのである。

即ちこれを説明すれば、建築は非常に範圍が廣いが、最も重要にして且必要なるものは住宅である。日本に於てはその建築の千分の九百九十五までが住宅である。住宅は人間を住はせる家であり、人を收容するものは學校、劇場、官衙、病院等々の公共建築である。建築の對照物は人であり、これが非常に重大な點で、人間は生きる爲に家に住ふ。しからは建築は健康に適し、精神に慰安を與へ、仕事も出來、萬事に便利でなければならぬ。更に人間には情があり、しかも人各々相違せる情がある。建築はこれをも考慮し満足せしめねばならぬのである。

建築は工學に屬す。工學と云へ、土木、機械等とは範疇を異にするのであ

る。家は一介の道具に非ずして人の生活を保護するが、又直接生活に關係を有するものである。人間には情があるから、之に應ずる建築も容易でなく、只だ堅牢の一點張りで、何の趣味もなければ住居出來ず、趣味が豊かでも構造が脆弱ならば目的に達せぬのである。

建築は地上に構築すると云つたが、これは如何なる意味か。それは、建築は他の物件と違ひ、必ず大空を配景として地上に立つべきものであり、従て附近の土地の環境、地盤の硬軟、太陽の光線の關係、背景の樹木等の考慮、等々雑多な條件を必要とするものは他に類例がないのである。建築は赤裸々で空中に立つてゐるので何處からでも見られる。逃げも隠れも出來ぬ。雨や風にさらされても、地震や雷電に威嚇されてもビクともしない丈けの用意を備へねばならぬ。斯くして家内の人々を保護し安堵せしむる心情は洵に感激に値するものと思ふ。次に建築は人を住はせ又は收容させると云ふのは、一例を挙げれば、船

は人を住はせ又は收容しても、地上に築造されぬ故に建築物とは言はれず、又汽車飛行機等の如く人を收容するものもあるが、之等は地上を走り空に翔るが故に建築物とは言へず、逆に倉庫、記念塔の如きは、人を住はせず人を收容せざるも、これ又立派な建築である。人の屍を納るゝ墓の如きも、時に大建築として堂々と聳ゆるものもある。要するに「除外例無き定義は世にその例なし」で、建築の例も之に準ずるのであるが、元來建築の定義を確定せんとするは無理な注文である。

第二節 衣食住の住として

本題の内容は既に前述した所であるが、茲に少しく之を補ふのである。人を

住はせる爲に地上に築造するものは住家であり、諸建築中最も重要なものでもあり、衣食と共に人間生活の三大要素である。但し衣食は時々刻々簡単に變改して生存の利便を得ることが出来るが、住は地上に固定する巨構であるから、一度これを築造すれば容易にこれを變改し難いのである。卑近の例を擧げるならば、衣であれば何處に於ても夏は浴衣一枚で足り、その柄を選んで満足する。冬なれば綿入れを重ねて凌ぐことを得、柄等も又同じく自由に選擇し得、家庭にて簡単に造り替へ又は修理することも出来るのである。食に至つては更に便利であり、今日不味の食に遭つて不平ならば翌日美味を食つて報償し得、和・漢・洋三種の料理を任意に選ぶ法もあり、或は家庭料理の特殊を賞する樂みもある。只だ健康を害せざる用意周到ならば則ち足るのである。

然るに住に於ては多額の金錢と土地とを要し、平面計畫より外觀内容の設計に心血を凝ぎ、而してその完成を見る迄に相當の年月を費し、しかも一度築造

を了れば簡単に之を改造することは困難であり、成績面白からずとして之を捨て、更に再建するは殊に大事であり、さればとて、衣食の如く不用家屋を倉庫の裡に貯藏することも出来ぬのである。幸にして成績好良にして、公衆環視の裡に全貌を誇示することを得るも、住は衣食の如く寒暑に應じてその外形内容を替ふるに宜しからず、又趣味の轉換に應じて室内の造作等を變更するに難いのである。従て一度不完全なる住を營むときは相當の長年月間は不便を忍び、不愉快をも忍ばなければならぬ。況んや自己の理想に反する借家に住して、不平不満の生活を營むが如きは、實に忍ぶべからざる苦痛であらう。即ち、衣食住と並稱するも、住は衣食に比してその性質に雲泥の差異があるのである。

建築の種類は、その分類の性質に従つて區々である。西洋では昔しから宗教的及び非宗教的建築の二大綱に分ち、更に之を若干の目に分け、住家は非宗教的建築の最低位に置かれて居た。日本でも始めはこの式に據て分類してゐたが

今は斯の如き不都合な分類を守る者はないのである。建築の分類は、或はその發生發達の順序に由るか、或は人間生活に應ずる建築の性質に由るか、如何様にも處理し得るのであるが、何としても人間生活の第一線に立つ住家が、建築界の最も主要なるものでなければならぬのである。

住家は生活に必須の物であるが故に、實用的即ち物的の建築であると同時に、一家團欒の場所として、趣味的即ち情的の建築であり、即ち物と心とを兼ね具へたものでなければならぬ。従つて總ての建築の中に就て、最も重要にして且意味深く、之を造るに最も六ヶ敷いものは住家である。住家は九尺二間の矮屋でも數百坪の邸宅でもその量に相違こそあれ、その計畫の苦心に二ツは無い。大建築が高級であり、小建築が低級であると云ふのは間違ひである。

古人は「居は心に移す」と云つてゐる。居の環境やその内容の氣分が住者の心理を左右することを思へば、住居の極めて重大なることに想到すべきである。この意味に於て、所謂家相も亦た絶対に迷信であるとは言へぬ。要するに建築を衣食住の一科と認むることは早計である。

第三節 藝術の一科として

歐羅巴に於ては古く希臘時代より建築に多大の關心を有し、爾來大藝術として尊重し來つたが、ルネッサンス時代より繪畫、彫刻、建築を以て藝術の三姉妹と稱し、或は繪畫彫刻を自由藝術又は純粹美術と云ひ、建築を非自由藝術又は應用藝術と稱してゐる。これは建築が實用本位の性質を有するが爲であつた。我國に於てもこの歐羅巴の影響により、今日に至つてもなほこの三科を同列に置いて三姉妹と稱し、就中建築を最下位に置く風があるが、これは全く歐羅

巴の考へ方の追隨である。

希臘等では太古より建築には必ず彫刻が隨伴してゐるが、日本建築は然らず三姉妹の末席等と呼ばれることは建築にとつては迷惑であり、極めて不適な論と云ふべきである。勿論建築は一半に於て物質的のものであるが、他の一半は精神的のものである。即ち建築は繪畫や彫刻の如き純粹の藝術とは云へぬが、別に繪畫彫刻に見ることの出來ぬ特殊の雄大深刻なる美を有してゐるのである。

建築はよく繪畫彫刻を驅使するが、繪畫彫刻は建築を操縦することは出來ない。日本に於ても立派な建築には彫刻が欄間等に取り入れられ、繪畫は壁や襖に描かれる。繪畫彫刻は作者が自ら考案し、自らの手で描寫し彫鑿して仕上げ得るのであるが、建築の場合は、建築家の手では施工し難く、他人の手を借りねば構架の實技は出來難いのであつて、時日も、時には數ヶ年を要し、從て莫大

な費用を要するのである。しかも長い工期間には、その建築家の思想や趣味の變遷を生じ、原考案に若干の修正が加へられ、注文者、設計者、施工者の三角關係が兎角動搖するので、建築家の理想は充分に實現されず、その百分の八十程度に實現されるれば上々の出來と云はなければならぬと思ふのである。

繪畫彫刻は、作者がこれを即興に作ることも出来るし、若し失敗すれば破毀して改作することも可能であり、或は之を筐底に隠して公表せざることも得るが、建築は氣紛れには造れず、一旦造つたものは公衆環視の裡に天空を背景として地上に立たねばならぬ。逃げるも匿れもすることが出來ないのである。茲に建築の大責任がある。即ち建築は一面に於て藝術であるが、繪畫彫刻とはその性質に於て格段の相違があるのである。然らば建築を藝術として見た場合如何かと云へば、繪畫には繪畫の美があり、彫刻には彫刻の美があり、建築には建築美があり同日に比較すべき性質のものではない。

要するに建築の美は第一に外觀の輪郭の構成に在り、或は端正なる均齊となり、或は奇巧なる均衡となり、崇高となり、高雅となり、秀麗となり、優美となり、千態萬狀、變化無窮である。其内容は外觀と調和し、其材料は適材適所に、其構造は強弱度に適ひ、一點間然する處無くして完備せる美建築を大成するのである。若し夫れ質量の美に於ては、堂々たる巨殿は觀客をして魁偉の美を感ぜしめ、巍々たる高閣は衆人をして峻秀の美に酔はしむるが、洒瀟たる亭榭の如きに在りては一變して輕快の妙技に怡然たらしめるのである。

結局建築の美は彫刻・繪畫とは其範疇を異にするものがあるので、三者姉妹の關係は首肯し難い。建築は獨立の一科であり、しかも時に彫刻・繪畫と相提携する場合があるのである。

第四節 土木の一科として

建築は又現今の用語として土木と兄弟の關係があると考へられる。或る場合には朋友の關係ともなると見られる。元來土木とは土・木・鐵・石の類を使用して構築する作業の意味に於て獨立の一科とせるものなるが、今日の土木工學は更に進歩して深く科學の領土に團結されてゐるのである。

橋梁の如きは或は建築的であり、或は土木的であるが、これは美觀を必要とする場合である。神社の橋・參道・濠・石垣・土壘・庭園等、風致を添ふべき施設は皆土木と建築の中間にあるものであり、周防の錦帶橋、長崎の穹窿橋、滋賀縣日枝神社の三橋の如き國寶に指定されたものもあつて、建築と土木の關

係に密接なるものが少なくない。

又都市計畫の施工の如きは兩者相伴はなければ成立せぬ。都市とは建築物と市街との綜合に由て成立するもので、街路園地に至つても、兩者の相提携を要する場合が多いのである。

庭園も亦庭師のみの仕事にあらず、家との調和を捨て、は考へられぬものである。茶室があれば露地の要があり、大邸宅の庭園にせよ小住宅の庭にせよ、庭は家の連續であつて、兩者綜合して一のものとなるが故に、庭は半土木、半建築と云ふことが出来る。古くより土木工事と建築工事を合せ、一括して「土木の功」と稱して來たのは偶然ではない。

一般に土木は藝術的要素に乏しく、建築は藝術的趣味に豊かなるものと合點するのは必ずしも妥當ではないのである。但し建築が土木と相提携する場合には、工學即ち應用科學が重大なる役割をなし、繪畫彫刻と連絡する場合には藝

術が必須の協力を演じ、衣食住と相伍する場合には生活問題が互に相交渉するのであつて、建築は洵に多事多端の境遇に在るのである。故に今日日本に於ては、建築の學藝は官公私大學で之を教へてゐるが、帝國大學に於ては工學部に建築科ありて科學的原理を主とし、材料、構造、意匠等を教へ、工業大學にも建築科を置き、住宅建築、アパート、工業建築等、多量の生産と能率を中心として研究するのである。又美術學校にも建築學科あり、この建前は藝術としての建築の研究で、その意匠や裝飾の問題を主とするのであり、工藝學校に於ても同じく意匠、工藝的方面より一通り建築を教へるのである。

斯の如く多方面に互る性質の學問は他に類例が無いのであつて、この事實より見ても建築の複雑さ廣範さを知るに足るであらう。この多岐に互る各方面の問題を悉く學び盡すことは實際に於て不可能であり、建築家は當然各自の分科を選んで自家の特殊専門とすることは、猶ほ醫家が各自夫れ／＼の専門科を選

ぶが如くであるが、その前に、是非修得すべき問題は、建築の根本原理の考査である。何れの分科も根本原理の根柢から出る枝であり葉であり、花となり實となつて世に貢獻するのである。

第五節 學と藝、理と情、物と心

要するに建築は學と藝の二元が融和した大極である。建築は學のみで出来るものに非ず、藝のみで成るものではない。

これを換言すれば、建築は理と情の共調に由つて始めて大成する。即ち學は建築に於ける理論であり、藝は建築に於ける構成の美等を考へる情である。更にこれを換言するならば物と心の綜合である。物は具體的の材料構造であり、

心は無形の意匠の感覺である。

建築は、物であるところの材料構造を、心であるところの意匠の感覺を以て處理し、この二元を綜合して善美なる建築を大成するのであつて、何れに偏することも宥されない。しかしこの理と情と、物と心との配合により、千差萬別の建築が出来るのである。例えば倉庫は、雷、火災、濕氣、蟲害等を防ぐべく工夫されてゐるから、物を藏するに適し、この場合情即ち人の居心持、住心持外觀の美は考慮されて居らぬのである。茶室はこれを造る場合に科學的理論では出來ず、所謂「わび」を旨として、閑寂の氣分を出す様な建築とならなければならぬ。この兩者の中間と云へるものが住宅である。住宅は即ち氣分よく楽しく住むことが出來、且つ萬端利便で、保健や經濟等に好都合であらねばならぬ。これは世界に共通した建築の二元である。

更に又建築と食物とを比較すれば、その間に非常な類似の點がある。即ち食

料は原料と調理との融和を必要とするのであつて、原料が何程好良でも、その調理法を誤つては何の甲斐もない。栄養に富むと言つても不味くは食するに堪えず、如何に美味くても栄養がなければ何にもならぬ。非常に栄養に富んで居る食料も、調理者の失策により、折角の栄養も零にしてしまふ場合さえある。建築に於て、この物心一如が完全に成つた場合は名建築となるのであるが、之は極めて六ヶ敷いことであり、世界にも僅かしか適例を算ふことが出来ないのである。

之を要するに、學が勝つて藝が負ける時は索莫無味なる建築となり、藝が強くて學が弱い時は柔弱或は突飛などの建築となる。結局學と藝が共に穩健であり優良であつて、その分量に誤りなければ善美なる建築が出来る。然らざれば畸形の建築となるのである。世界各国の建築が區々にして一定せぬのは、畢竟各國民の學と藝の性質が異り、分量が異り、兩者の配合の作業が區々であるからである。

日本に於て、如何に之を操縦すれば日本建築の實相が明白に現出するであらうか。

第三章 日本建築とは何ぞや

第一節 日本人に適する日本の建築

日本建築とは何であるか、一言にして云ふならば、日本人が日本人に適すべく日本の國土の上に建てる建築であると云へる。

支那人や歐羅巴人に適する建築が如何に立派であり、如何に富麗であるとも、日本人に適せざればこれは日本人にとつては無用の長物である。六尺の外人に適する衣服が如何に立派でも、五尺の日本人に適せざれば、それは日本人の役に立たぬが如くである。従つて、例えば外國人が日本に来て、非常に巧妙で立派な建築を建てたとしても、これは日本建築とは云ひ難いのであつて、東京の帝國ホテルの如きもその一例と認むべく、之は奇巧な建築に相違ないが、

アメリカ人の特殊の意匠により造つたものであるから、日本の土地に造られても日本建築とは言へない。この意義を間違つてはならないのである。

建築の真相を詮義すれば、その様式等は第二義であり、第一義はその思想、精神であることを特筆しなければならぬ。日本人が漫然と外國風の建築を模倣し、以て得々として居るのは醜態である。日本と外國とは總て事情が異つて居るのであるから、外國の建築は、原則として日本に適合し難いのが當然である。然るに何の考慮もなく彼に盲従することは全然無意味である。この實例は日本のみならず、世界の各地方にいくらでもある。やゝ突飛な例であるが、曾て或る人が「朝鮮には極めて重要な古建築として平壤の西郊に樂浪の古墳がある。朝鮮建築の誇りとすべき至寶である」と言つて、古代朝鮮の文化の旺盛なりしことを激賞したが、これは驚くべき錯覺である。樂浪は、支那の漢の武帝が今の朝鮮の北部を併合し、樂浪郡を置いたが、漢人の郡主等の墳墓が此處

に造られ、之を造つた工匠も漢人である。即ちこの遺跡は今日の朝鮮とは全然無關係である。樂浪古墳は驚嘆に價する重要物件であるが、それは漢文化の成蹟を談るものであり、朝鮮文化とは没交渉である。日本の長崎の崇福寺なども之に近いものである。下つて明治初年から中年に亘つて、東京に造られた若干の此の種の建築がある。例えば、新橋停車場、遊就館、鹿鳴館、ニコライ教會堂の如きもので、これ等は外人が外國式の建築を日本に造つたのであるから日本建築とは言へぬのである。

第二節 日本建築の特異性

世界各國の民族は各自特殊の性格、心理、趣味を有してゐる。即ち各國の建

築には各自の特殊の性質があるのである。即ち日本には日本人に適應する特殊の建築がなければならぬ。然らば日本人の要求する建築とは如何なるものであるか。後章に之を解説するが、要するに日本は日本の立場を堅守すればよいのである。漫然外國風を模倣するが如きは百の害あつて一の利もない。勿論彼の長所を攝取して之を利用し得るならば洵に結構である。然し之に盲從することは斷じて不可である。例えば、外人に適する食物を隨時試することは差支へなきも、そのまま日本人の常食とすることは不可であり、日本人にも適すべき食料を日本的に調理するは可なるが如きものである。

然るに、茲に注意すべきは「彼の長所を取りて我の短所を補ふ」といふ事が、殆ど不可能であるといふ事である。借問す、長とは何ぞや、短とは何ぞや。多くの場合に於て、長は同時に短であり、短は同時に長である。長短は紙の表裏の如きものである。例えば彼の長所はその雄辯である、宜しく我の訥辯を去て

彼の雄辯を取るべしと言つても、それは不可能であらう。況や彼は雄辯であるが兎角詭辯に陥り或は冗辯に流れて人に信用されぬ短所を曝露し、此は訥辯であるが一言一句誤ることなく、よく人に信頼されるといふが如き長所を有することなきや。要するに、眞の長は之を取ることが出来ぬのである。人に取られる様な長は眞の長ではないと思ふ。自分の短を憂ひて人の長を取らんとするよりは、寧ろ自力を以て己れの短を補ふことが賢明であらう。己の短を知る程の明があるならば、その人は必ず短ではないと思ふ。建築に於ても斯の如くである筈である。

第三節 東西建築の軒輕

總じて歐米の事物は何事によらず日本の事物とは甚だしき軒輕がある。多くの物事は彼此正反對である。例えば文章の組織、姓名、年月日、住所等の措置配列、儀禮の作法等は完全に正反對であり、日常生活の微細な點に至るまで非常なる差を發見する。衣食、住も亦た斯の如くである。予は何故に東西の慣習が斯くも事毎に反對であるかを怪しまざるを得ない。この間に於て、住即ち建築も亦た甚だ相異なるのは當然でなければならぬのである。

建築は學藝の綜合であると云はれるが故に、一國の建築はよく國民一般の思想、趣味、技巧等を赤裸々に曝露するものである。既述の如く、建築は繪畫彫刻と違ひ、眞劍に最善を傾倒して造るものであるが故に、不識不知全能力を發揮して、假偽や欺瞞を許さぬのである。即ち一個人の建築はその人の性格を曝露し、一國の建築はその國の國性を曝露する。即ちある人の造つた建築をよく觀察して見れば、その人の趣味・性能を知ることが出來、更に之を擴大して見

れば、一國の建築を見ればその國の情態を察知し得るのである。

既往の文化の象徴として最も確實なるものも亦た建築であると思ふ。一般に古今文化の歴史を考査する人は、必ず文獻に依頼し、古書・古文書等を證據として判斷するが、それよりも古建築に據る方が慥に確實であると思ふ。「悉く書を信ずれば書無きに如かず」といふ古人の金言の通りで、古書には往々事實を誤つた記録もあり、事實を誇張し過ぎたり輕視したものもあり、原典より引用して錯誤を生じたり、その他頗る警戒を要するものがある。加之、古書には屢々偽書があり、なほ細かく詮義すれば、荒唐無稽の書物もある。即ち文獻に依頼して古文化を討ぬる時は極めて細心の注意を要して猶ほ且つ錯誤を免れ難いのである。然るに建築に於ては、古文書と違つて、絶対に偽物はない。誇張も貶黜もない、創立のまゝで赤裸々で公衆の裡に現參してゐる。秘密もなく、逃げる隠れもせぬ。文書は兎角行衛不明になるが、建築の行衛不明は無い。但

し茲に注意すべきは、建築は雨露に曝されるが故に腐朽を免れず、之に修理を加ふる際に、若干古式が抹殺され或は變更されるが、これは専門家の調査に由て解決されるのである。即ち古建築の研究に由て、比較的正しき古文化を知り、現代建築の視察に由て、正しき現代文化を悟り得るのである。要するに日本建築は木製の文獻であるが、支那には石造の文獻が夥しく存在してゐる。それは即ち碑碣である。

第四節 外國建築の印象

予は明治三十五年三月より同三十八年六月迄の間に支那、印度、土耳其を見學し、歐羅巴諸國を巡遊し、米國を經由して歸朝したことがある。勿論僅かに

三ヶ年と三ヶ月の短旅行であるから、思ふ存分の調査研究は出来なかつたが、その國々の建築を視察して大いに感ずる所があつた。

第一は、一國の建築の種類の觀察で、その種類の多少に由つて、その國の文化の程度を測り得るのである。種類が少ないのは文化の低い象徴であり、種類が多ければ多い程文化の進んだ國である。即ち建築は、原始的に近い國へ行くとその種類は數個を算えるのみであつた。日本に於ても、上古に於ける建築は住家系一種のみであつたと思はれる。それより次第に人口が増加して村落の形が出来、物を賣る爲に店舗が出来、交通が頻繁になるに従ひ旅客の宿泊の必要が生じて宿屋が出来るといふ風に發達し、爾來年と共に人口と建築とが併行して増殖し、現代一億の人口に伴なう各種建築の類別はどれ程であるかは勘算し切れぬ程になつたのである。

支那は人口未詳であり、約五億に近いと稱せられてゐるが、建築の種目は比

較的少ないのは、支那の國勢の振はざるを語るものである。印度は人口三億七千萬と概算されてゐるが、その建築には、物珍らしいものも、美しいものも相當にあるが、種目はよく分らぬのであつた。土耳其方面は、土耳其領以外、シリア、埃及等まで同系建築の境域で、目新しい建築が目につくが、その種目の貧弱なることは、支那と伯仲の間にあると感じたのである。

歐米諸國の方は、各國共に略ぼ一定の歩調であり、勿論時勢に副うて新種目を増加して行くが、英國の保守的と、米國の突飛的新種の反映は目に付いたのであつた。私はその當時から米國恐るべし、といふ感を起したのである。

第二は、建築の風貌を見て直ちにその建築主乃至建築家の心事、性格等を判知し得るの外、延てその國民性を通して國の盛衰を卜知し得ると思ふ事である。茲に或る家を造る時には建築家が家主の注文に應じて考察するのであるが建築物に關與した者は家主及び家族、或はその親戚、朋友、建築家及びその助

手等、工事請負者の連中等、時には數千人以上の魂の一部分が工事に參加してゐるのである。一つの建築は一人の魂の具現ではなくして多數の人の魂の集合と見られる。茲に國家的重要大建築が興される場合、その原案は少數の専門建築家の手に由て作製されても、感激に充ちたる日本國民の多數は、非常なる關心を以て、この建築に對する希望、勸告、稱讚等の誠意を送るならば、この大建築は立案の建築家一人の力ではなくして、一般國民の後援の力である。即ち、一個人の建築には一個人の精神が宿り、一國の建築には全國民の精神が宿ると言へるのである。

予の外國建築の印象の一端を約言すれば、支那建築は賢なるが如く愚なるが如く、精到なるが如く粗笨なるが如く、敏捷なるが如く迂鈍なるが如く、終に端倪すべからず。印度建築は空想的であり、西亞の回教建築は詩的である。歐土では、獨逸建築は武骨なる野武士の如く、佛國の建築は柔弱なる遊冶郎の如

く、英國建築は我儘なる樂隱居の如くである。米國建築は、一半は英式で一半は獨特の我儘なる突飛漢である。

この印象に由て、私は建築にも興國的・停頓的・亡國的等の區別があると思ふ。凡そ質實剛健にして虚飾なく、而も内容の充實するものは興國の建築であり、華美を衒ひ、虚構を事とするものは亡國であり、而してその中間に位して霸氣を失つて茫然たるものは停頓の國である。

第三は建築工事の景氣を見て、その國の榮枯を考察することが出来る。新築工事の股賑は國の發展を語り、寂莫は國の沈滞を示すのである。これも又予は至る處で體驗して來つたのであつた。六年前英國のロンドンを訪ふたが、四十年前に行つた當時のロンドンと較べて、その市街の爲體、その建築物は相變らず煤烟に塗れた古建築の風體を示し、新建築は、稀に見るが、それは新しいアメリカ式の建築である。何處を歩いても昔ながらの英國で、終に清新興國の氣

分を感じなかつたのである。その他に目につく程の大建築の工事は殆ど見られなかつた。これは英國の衰微を暗示するものである。

これと同様の現象は日本の都市に於ても見る所である。即ち盛んに建築土木の大工事を施行しつゝある都市は股賑の景氣に満ちて、その發展途上にあることを示し、寂莫たる昔ながらの都市は發展性がないのである。

米國はこの點では何と云つても股盛で、四十年前にニューヨークへ行つた時は市街全體が宛も工場の如く、建築土木工事で雑沓を極めて居り、六年前再び渡歐の途中ロサンゼルスに立寄つた時は、市街は大擴張され、近郊に無数の建築土木工事が經營されてゐたが、その建築たるや實に亂暴狼藉で、その様式、色彩の無軌道は恰も小兒の玩具箱をヒックリ返へした様な爲體である。予はこの光景を見て、米國人の無頓着で、毫も藝術的感覺を有せざるを知ると同時に、彼等の飽くまで放膽にして節度を無視する心理を付度したのである。

私は支那に於て、貴賤尊卑の別なく、その建築の茫洋にして奇怪なる風貌と、細部や裝飾に必ず富貴長命の吉祥を意味する手法を濫用するのを見て、その如何に利己的であり貪慾であり、傍若無人の無頓着なることが、一脈米國と相通するものあるを認めたのである。

印度に於ては、その開闢以來の印度教が、如何に深く民心に浸潤して居るかを知り、國民の空想的と樂天的の心理を印度教建築に徴して確知したのである。

土耳其乃至諸回教國に於ては、その回教が如何に國民に影響して居るかを感じ、其の國民が寧ろ詩的であつて、現實界を超越して居ることを、回教建築を通して悟つたのである。

埃及の古代の建築は謎の建築と云ふべく、古代希臘羅馬の建築は行儀のよい風格があるが、現代の建築の行儀風格は、皮相の假面の如く、内容は既に廢滅して居ると思はれる。其他の諸國の建築に就ては、煩雜冗漫を避けて之を列舉

せざることとするのである。

要するに一國の建築はその國の榮枯隆替を代表するものと言ふも過言ではな
いと思ふ。既述の如く、建築奢靡を盡して國を亡ぼしたるものは遠く羅馬帝國
のコロッセウム、カラカラの大浴堂等あり、近く印度の莫臥兒國のシャージャ
ハン帝の營造せるタージ・マハールあり。殷鑑遠からず、戒めざるべけんや。

遮莫予は勿論外國建築に對し漫然放言する者に非ず、只だ祖國日本の建築の
爲に之を語るのである。

第四章 國 土

第一節 土地の環境

日本建築の構成の基礎は、第一に日本の國土である。これは建築のみに関する事柄ではなく、凡そ一國の總ての文化はその國の土地と民族より生れるものであり、赤子が父と母より生れると同じ様に、國土を母とし、民族を父とし、その間より文化が生れるのである。従つて如何なる文化も、その國土、民族に似た文化が生れることは當然であつて、建築も亦た同様である。土地と民族は即ち地理と歴史である。

地理に關する重要條件は三つある。第一は土地の環境である。日本は東亞海上の孤島として別天地である。その地は適好な温帯に位し、國狭くして山河皆

な小規模であるが、風光明媚、こまやかに美しい風土である。この間に生れる建築は當然小規模であり、こまやかに纏つた美しい建築でなければならぬのであつて、大陸の茫莫として荒寥なる地方に生れる建築の粗大にして冷硬なるものとは範疇を異にするのである。

第二は、土地に則するのである。即ちその環境に應じて建築が出来るのである。この一例として埃及のピラミットを舉げるならば、誰人も首肯し得るであらう。即ちピラミットは古代埃及國王の陵墓で、その方錐形の頂點までの高さ四百八十尺もあり、變哲もなき簡單な石の堆積であるが、之を仰ぎ見るとき、何人もその偉容に魅せられて、何の理由もなく、只だ呀と感嘆するのである。これは勿論質量の大に於て一種の威壓を感じしめられるのであるが、之に伴ふ環境が重大な役割を演じてゐるのである。ピラミットは一望千里のリビア沙漠の東端に屹立し、東方廣漠たる埃及平野を俯瞰して立つてゐるが、つくづくそ

の環境を観れば、水平の地平線に斜線の大ピラミットの外に一つも軟弱の曲線を交へず、紺碧の天空、褐色の沙漠、五千年の風雨に曝された蒼然たる巨塔、その他に一つも俗惡の邪魔物を加へない。觀客が魂去り魄飛ぶ迄に感嘆するのは之が爲である。今若し假りにこのピラミットを東京銀座街の中央に建てて見たら如何であらう。二町四方もある馬鹿げた場所よさげの邪魔物が出来たと云ふだけの事で一顧に値せぬ。

第三に建築は背景に由つて活きる。日本の建築はその周囲の背景に應じて美であり、歐土、支那の建築も亦たその背景に由つて活きるのである。日本の地形は濃やかにして變化に富み、箱庭的氣分である。崗巒、平野、樹林、田畝、深潭、淺流、洶に面白き風情である。その間に隠見する家屋は斯の如き自然の背景に適應してその美を成すので、實に諸外國に見るべからざる風致である。即ち日本家屋は風致に富むと雖も規模小にして思ひ切つた破天荒の大建築を案

出し得ない。日本の最大建築と稱するものも、之を世界の舞臺に登場せしむれば見すばらしき程の小建築である。併し、「山高きが故に貴からず」建築大なるが故に貴からず、量は質に如かざることを思ふべきである。

次に地理に關して、緯度に伴ふ日射の重要問題がある。例えば東京市の半蔵門外の地點は北緯三十五度四十一分であるが、この地點に於て、夏至の日に於ける正午の太陽の位置は水平に對して七十五度の高さに昇り、冬至に於て三十四度に止まり、春分秋分に於て五十四度である。この事は非常に重要であつて即ち盛夏の候炎熱の日射を屋内に入れざる爲に相當軒を深くし、この軒の深さに由て、冬季には日射を室内に迎へ入れ、春分秋分の頃には溫暖なる日射を椽側まで取り入るゝ作用をなすのである。

歐羅巴殊に英佛獨は高緯度に在り、伯林は樺太の北端に近く、巴里は樺太の南部に位してゐる。緯度が高いと云ふことは太陽が低いことである。従つてここでは軒を深くして日射を防ぐことは無用であり、窓を高く大きくしてこれを迎へ入れることが必要である。北歐の如き高緯度地方に於ては、盛夏と雖も炎熱の苦なきが故に、軒の必要は尙更ない。北緯三十五度を中心とする日本に於て、北緯五十度以上に在る歐羅巴の建築を眞似し、大切な役目をなす軒先きを切取るが如きは、驚くべき間違ひであらう。

日本は周知の如く強烈なる季節風が強く、雨量も相當に多く、従て暴風雨が多いので、雨が横殴りに壁上に吹きつけて、之を損傷し腐蝕させるが故に、之を保護する爲にも又軒を適當に深くすることが望ましいのである。この一例によつても、日本建築は外國建築とは根本的に相違せねばならぬことが判るであらう。

第二節 氣候

第二は氣候である。之に關して又若干の要項がある。

その第一は氣温である。東京に於て一年平均氣温は攝氏十三度五十分であり恰も適好である。世界的にみて最も恵まれた氣温である。夏季は相當に熱く、冬季は可なり寒い、耐え難いといふ程ではない。即ち堅實なる壁を作つて、寒暑の外氣を遮斷する必要はなく、暖房、冷房の設備も、必しも絶對必要といふにも及ばない。日本建築には古來暖房設備がなく、寒さを凌ぐ爲には今日でも僅かに火鉢や炬燵の姑息なる假りの設備で間に合せているが、これは必しも蠻族の遺習ではない。別に理由のある事である。兎に角日本の建築はその氣候

に順應し、春秋の平均氣候を標準としたものと解し得るのである。四季折り／＼の氣候に對して常に適應すべき建築を案出することは不可能であると思ふ。冬に宜しければ夏に宜しからず、夏に適すれば冬に適せざるは、大自然の命ずる所である。

次に茲に厄介なのは湿度の問題である。日本は高湿度の國であり、特に盛夏の候に湿度が最も高いのは頗る難儀で、殆ど蒸風呂の裡にあるが如き感がある。而して冬は反對に湿度少く、著しく乾燥するのである。

之に對する防濕の唯一の方法は、家屋を開放的に作り、通風の便を圖ることが第一である。襖や障子を取はづし得る様に作り、床の下も開放して通風を便にすることである。

北歐地方は日本とは反對であつて、夏は湿度少なく冬は多い。彼の地方の盛夏は、日本の初夏初秋よりも涼しく、嚴冬は日本より一段と寒いのである。從

つて夏でも厚い毛織の服で過ごし、家の四壁を石や土で固めて外氣を入れず、室内は冬本位として暖かい氣分を主としてゐる。客室の床の中央に儀飾的の暖爐が切込んであるが、それは日本の上段の床の間に當るのである。然し日本では之と正反對で、冬より夏を本位として、清涼の氣分に満ちた建築を愛するのである。その座敷は、床の間を上座とし、床には一幅の軸物、一合の香爐を以て全室を引きしめ、客と對するには座蒲團一枚、冬ならば火鉢一つ、清々として爽やかである。これを歐式の室内に、所せまき迄種々雑多の物件を羅列し、溫暖的氣分を賑はさんとするに比ぶれば、その差は雲泥よりも甚しいのである。

明治維新前後の歐人が、「日本の家は薄つべらな板と紙で作つた明け放しの小屋である」と評したのは、蓋し已を以て人を律するの愚を暴露したのである。

日本では太古より以上の點に注意し來つたのであつた。例えば吉田兼好は徒

然草に於て

「家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬は如何なる所にも住まる。暑き頃悪き住ひは堪へ難きことなり。深き水は涼しげ無し。淺くて流れたる、遂に涼し。細かなる物を見るに、遣戸は、葎の間よりも明し。天井の高きは、冬寒く燈暗し。『造作は、用無き所を作りたる、見るも面白く、よろづの用にも立ちて宜し。』とぞ、人の定め合ひ侍りし。」

と名文を書いてゐる。

以上の簡明なる事實を知らずして、何事も氣候風土の根本的相違ある歐國風の家を無條件で模倣するが如きは、その愚や及ぶべからず。

次に付言したきは日本の高濕度による効力である。日本の湿度の人間生活に與ふる効果は頗る大であり、春の霞、秋の霧等人間に潤ひを與へ、亦た濕度によつて漆工を完成せしめ、木材の割れや狂ひの生ずるを防ぐのである。諸外國

に於ては、建具師・指物師等の仕事は、極めて粗拙であり、容易に狂ひを生じ又は破壊するが、日本に於ては總じて繼手指口の仕事に精妙である上に、大自らの適度な湿度に恵まれて、些の狂ひも生じないので、流石の日本蠻國論者も、これには一言も無いのである。

第三節 天然資源

何れの國に於ても、本來家を作るには先づ自國內の手近に産する天然物資を利用するものである。森林國では木材を用ゐ、沙漠地帯の木の無い所では或は石を用ゐ或は泥や砂を用ゐ、時には天幕に住ひ、極北のエスキモーの如きは氷を以て家を作るのである。

日本は世界稀有の大森林國である。日本全土の百分の七十は樹木で掩はれ、百分の四十は森林と稱すべき程度であることは前に述べた所である。しかも樹種に屈竟の良材である檜を始め、以下無數の針葉樹が豊富である。

檜は日本第一の優良材にて、その樹幹は垂直に育成し、本と末との太さに大なる相異なく、材質も美しく、年輪整調にして細かく、その肌相に言ふべからざる品位あり、しかも堅牢にして弾力に富み、自ら發する芳香の爲に蟲害を卻け、腐朽に耐ゆる等、正に名木と稱すべきである。特に木曾に産する檜は最も優秀にして、實に日本の重寶と云ふべきものである。

日本に於ては、太古に於て斯の如き伐れども盡きの優良木を極めて容易に切倒して家を建てたのである。然らば石材は如何と問ふならば、人間の住ふ石造建築は無かつたが、石を工作する技術は既に知つて居たのである。石棺、石槨等は即ちその好例であるが、住家建築の石造は、その必要を認めなかつたので

ある。

木材は腐朽し易く焼け易いのに、何故住家に木材を使つて、石を用ゐなかつたかと怪しむ人もあるが、太古に於ては家は一代限りであつた。即ち一家に死者を出せば、その家は穢れたるものとして之を捨てた。即ち所謂奥津棄戸オキツスダベである。そして別に新しく家を作つたのである。然し人は死すとも魂は永久に生きてゐるといふ觀念により、高貴の人の死骸は永久的なる石棺に納めたものと予は考へるのである。

日本が木材國であり、木造建築の發達したのは自然順應の妙である。日本の家は將來も永く木造であるべき筈である。或る建築家は、日本の建築は將來全部コンクリート造にしなければならぬと強調してゐるが、遠い將來は勿論逆睹し難きも、それは先づ不可能であらう、只だ或る特殊の建築は、コンクリート造であるべきである。

明治の初年に或外人は、「日本で木造平屋の家を標準とするは地震に備ふる爲であらう」と云つた。之に對して日本の智識階級は忽ち雷同して「成る程それに相違ない、日本人は古來用意周到であつた」と誇つたが、これは實に笑ふべき愚論である。太古に於て堀立柱の民家が三々五々散在して居た時、何で地震を恐れる必要があつたであらう。家を潰崩する程の地震は、平均七八十年乃至百年に一回に過ぎぬ。この稀有の災害を慮つて、石造を避けて木造の家を作るといふことは有り得ることではない。地震を恐れる位なら、寧ろ先づ比較的頻繁に起るべき火災や木材の腐朽を考慮して石造の家を造る筈である。日本で地震を恐れ出したのは、大都會が成立し、大なる家屋が櫛比し、之に伴なう火災を怕れてから以後のことである。

日本の建築は結局木材より生れたのみならず、總て植物性の材料で作ら上げた。屋根は本來雨を防ぐ爲に作つたのであり、雨がなければ勾配は無用であ

る。雨があつても、雨漏りを完全に防ぐ工夫があれば陸屋根でも差支がなく、近頃歐式の陸屋根が日本にも多く見られるが、これは當然の事ながら、矢張り勾配屋根の方が安全である。その屋根は藁や茅で葺いたのであつて、これで葺くと勾配を急にしなければ雨が漏るのである。この藁や茅の屋根は腐朽し易いが之を補修することは容易であり、且つ保健上最も有効であることは、専門家の斷言する處である。藁や茅葺の後に板葺が使用せられ、更にその後檜皮葺が行はれ、佛寺建築が興つて瓦葺が現れた。壁も當初は板壁で、土壁は大陸建築の輸入のものである。柱の下に石の礎を置いたのも同様のことで、太古は柱を地中に埋めたのである。「底津磐根に宮柱太しき立て」とはこの事である。これが太古に於ける日本人が大自然に順應して作った建築で、之を原始的蠻族の低劣なる愚案と罵るは當らない。大自然の順應に出發し、大自然の順應に始終する事は當然の経路である。

第五章 國 民

第一節 生活様式

次に國民、即ち人文の問題に入る。

その第一は生活様式で、之に由て建築の具體的條件が決定されるのである。本來日本は民族的にみても南洋との關係を無視することは出來ないのである。つて、その生活様式にも相似た所があり、建築的にみるならば、日本南洋均しく植物性一式で作られ、開放的で床が高い等の諸點を擧げることが出来る。

扱日本の生活様式であるが、就中その最も重大なるは日常起居の様式である。日本に於ては開闢以來若干の後代に至り、一通りの生活様式が定つた時より、素足で室内に入り、床の上に平座して生活する習慣であつた。所謂座禮で

ある。床は板敷で、各室の仕切は時代により、用途により、住者の身分によりて差別はあるが、概して何時でも之を取拂つて、二室乃至數室を併合して廣く使用することが出来ると同時に、廣い一室を幾つにも仕切つて使ふことが出来る。之を歐羅巴民族の生活様式に比すれば全く正反對である。即ち歐羅巴に於ては、元來床は土間であり、後世文化の推移に従て、床上に煉瓦、石、タイルモザイク等を張り、或は寄木細工を張り、なほ足らずしてその上に絨氈を布き、その上に椅子、卓等の家具を置き、土足のまゝで起居すべく設備されてゐるので、室内も戸外の地面の延長に過ぎないのである。部屋は一つ一つ區切り扉と廊下によつて連絡し、住人は各室に割據して生活する形であるが日本は家族共同生活である。

之を具體的に細説するならば、第一に重大なる問題は禮である。禮とは歐羅巴に無い特殊のもので、簡単に説明は出来ないが、通俗の所謂禮とは大に異なる、つまり人道の最大基準となるべき徳である。日本の生活様式は坐禮であると言ふのは、日常生活に於ける起居進退の作法の出發點が床上に正しく靜坐することにあるの謂である。日本では客と相對して禮を交換する時、双方共に床上に膝を折て靜座し、互に兩手を床の上に置き低頭して挨拶するを正式とするのである。靜坐するといふことは、床の上にびたりと身體を密著して動かぬことであつて靜の型である。頭を下げる時兩手を床に著けるのは手を動かさぬ形であり、低頭して互に顔を見交はさぬのは服従の意を表してゐるのであつて、「私は貴下に對して服従する。手向ひはせぬ。打つなり蹴るなり存分にされよ逃げも隠れもせぬ」といふ意味を示すもので、即ち双方平和の裡に交歡するの態度である。

歐人は日本と反對に、主客起立して禮を交す、即ち立禮である。日本では、立つてゐても、客有るときは坐つて迎へるのであるが、歐人は椅子に凭つてゐ

ても、立上つて客に對する。然して顔を見合はせ、右手を開いて握手する。握手とは何を意味するか、それは互に手の中を見せ「私は貴下に對して殺意はない、兇器等は持つて居ない」と云ふことを表はすのであるが、いざといへば直に對手に飛び掛るか又は逃げるかの姿勢であつて、動の型である。即ち我は靜彼は動の態度である。東西の舉動は斯の如く反對であるが、何事でも東西の慣習作法は殆ど常に斯の如くである。

日本の家の床は人の身體と密接するが故に、温かく肌ざはり好き材料を以て作られねばならぬ。後世床の上に畳が出来、障子、襖等の建具も同じく温味のある柔い材料によつて出来たが、壁も天井も、總てが溫柔の感を與ふるものたるを要するのである。

歐羅巴の家の床は戸外の地面の延長で、土足で踏まれるが故に、土でも石でも瓦でもよく、従つて建具や壁天井も冷硬なる石や土や金屬でよいのである。

床が道路の延長である以上、如何に清潔に處理しても土足であるから、精神的に不潔の感は免がれ得ず、即ち床の上には何一つ置くことが出来ない、加之椅子卓子式では何物を置くにも臺が必要となり、室内は臺だらけになる。先づ寝る爲にはベッドといふ場所ふさげの臺を置き、この上に寝なければならぬ。日本の床は必しも清潔とは云ひ難いが、精神的に清潔と感ずるが故に、畳の上に乗るのである。歐羅巴の家には何一つ置くにしても臺を必要とするので、床面の利用は殆ど出来ないのである。即ち歐式の家には比較的廣き部屋を要しその部屋は融通の利かざる一室一役であるから、日本の融通便利の家に比して著しく不經濟である。例えば日本家三十坪の廣さで足るべきものは、歐式にすれば六十坪にしてなほ足らぬであらう。

次に問題となるのは、日本の室内の調子は落着いて低いのに對し、歐羅巴のは往々にして不自然に高いことである。これは日本人が短身の爲でもあるが、

それよりも坐禮に關係する所が多いのである。坐ると立つとでは眼の高さの差は凡そ一尺五寸位であらう。日本では坐禮によつて眼の高さが低いので、之が總ての高さの標準となつて、天井の高さも屋根の高さも低くなる。歐羅巴では立禮であるから眼の高さに従つて何物も高くなるのである。例えば日本の床の間や床棚にしても、坐つて見てよい高さであり、歐羅巴では椅子に腰掛けて物を見るから、それだけ標準が高くなる。但し元來建築の高さには自づから規準があり、之を超越することは無い筈であるが、日本では寧ろ低きを好しとし、歐土では寧ろ高きを良しとする傾向があるのは、左もあるべき事である。

支那に於ては、古代秦漢頃までは坐禮であつたが、六朝頃より立禮となつて今日に至つたのであつて、建築も之に準じ、一種の歐的臭味を帯びてゐる。

第二節 信 仰

日本民族の宗教的信仰の最も重大なるものは祖先崇敬であり、之が神社崇敬の根本となり、日本の神道の發祥となる。神靈は清淨無垢潔白にして、穢れを受け給はぬのであるから、社殿の建築は必ず素木造りであり、簡素にして、怪奇な彫刻や毒々しき色彩等は施すべからざるものと信ぜられてゐた。人或は之を原始的の現象とし、藝術的に幼稚であつたが爲と云ふが、これは大いなる誤りである。南洋土人やアメリカインディヤンの如きは、原始民族でありながら怪奇なる彫刻や俗惡なる色彩を施して喜んで居るではないか。

この信仰は對神社より對一般の家庭に普及し、清淨を尊び穢れを忌むといふ

心理は、一種の恐怖心より出るものであつた。古代の日本風俗に於ては月經や出産を穢れとして、出産の時にはわざ／＼産室を作り、後これを壊し棄てたのである。穢れとして最も忌むものは前章既述の人の死である。古代に於て、一家に死者を出す時は、その家を穢れたるものとしてこれを棄てた。所謂奥津棄戸おくつすたへである。而して別に新しき家を造るのである。即ち家は永久的性質のものではなく、一家一代の考で造られる。或る外人は曾てこの現象を評して、「日本の家は永久性無くして一時的なり、これ日本民族が何事にも一時的で、永久の計を立てんとする思慮を缺くに由る」と云つたのは甚だしき誤謬である。

この穢れたる家を棄てる習慣を永く繼續したのは、恐れ多きことながら御歴代 天皇の宮室である。皇室に於かせられては 神武天皇より 天武天皇までは 天皇の崩御あらせらるゝ毎にその宮を御棄てになり、他へ宮を御移しあそばされたのであつて、これを嚴重に御守りになつたのである。即ち 神武天皇

が橿原に宮を御造營あそばされしより以來、御一代毎に、都を何處々々に移し何々の宮と申し上げた。然し古代上代に於ては、皇都は大都會ではなかつたし、宮も簡素であらせられたから、比較的容易に近邊の地へ宮を御移しあそばすことが出来たのである。然して 持統 文武兩天皇は藤原京に在しまし、 元明天皇より 光仁天皇までの七代を奈良京に、 桓武天皇に至り平安京即ち京都に御奠都あらせられるといふやうに、順次國都の永久性を延長せられたのである。明治天皇に至り東京に遷都あらせられたが、東京は永久的な國都と見奉ることが出来よう。

凡そ人の命は數十年であるが故に、その住家も亦數十年の壽命で足るとして木造の家が營まれ、靈の命は無窮であるが故に、その家は永久的の設備であつた。それは即ち陵墓である。神社は神靈さながら現し世に在ますの禮を以てするが故に木造として、隨時新しく造替されたのである。

第三節 趣味

日本民族の趣味の豊富なることは世界に類例を見ざるものがある。就中最も特色あるものは大自然に對する感興であつて、延て之に深甚の親しみを以て之を美化し謳歌禮讚し、果は之を藝術化して建築・工藝・文藝等に適用するに至つたのである。例えば日月星辰、禽獸草木、さては有らゆる自然現象、即ち雨雪、雲、霞、水、雷等に至るまで盡く之を愛玩するに至つたことは世界にその比を見ぬところである。

古來、我が民族が梅、櫻等の花を伴とし、春秋二季の七草を愛で、雨の多き國として、春は春雨や卯の花くだし、初夏に五月雨、秋は時雨、四季折々の雨

の風情にあこがれて詩歌を詠じ、雲や水の如き形なきものに形を賦して意匠考案に耽るが如き、如何にも床しく嬉しきことであるが、歐人にはこれがない。チラ／＼と雪が降れば、日本人は襟先きの障子を開け放して、雪を眺めて腰折れの一句も口すさぶのであるが、歐人は窓を閉ぢてストーヴを取り圍むのである。但し彼はスキーに遠征することなどは忘れぬのである。

斯の如く自然を朋として終に自然に同化する日本人は、建築と庭との不可分の關係を結ぶやうになつたのである。日本に於て、庭は家の連續でもあり家の一部でもある。如何に小さな家にも、之に相應する猫額大の小庭を作り、木を植ゑ石を置かねば氣が濟まぬのである。歐土に於ては日本の所謂庭はない。家の前又は後にグラウンドを作り、芝生を作るが、それは實用的に造つた「ガーデン」であつて、風情を楽しむ爲の「にわ」ではない。ガーデンは趣味や藝術の爲めではなく、蔬菜園、果樹園、花園等何れも實用的の目的で作つたものであり、

動物園、植物園など、同じ範疇に属するものである。即ち庭とガーデンとは似て非なるものである。支那では家の前の廣場を庭と稱し、後の土地に花樹を植えて園と稱し、假山泉池等の構築を林泉と稱して居るが、何れも日本固有の庭とは大に異なるものである。

日本人は高山峻嶺を仰いで、その大自然の偉力に感激し、峻嶺に靈ありとして尊崇し、昔の登山者は六根清淨を唱へつゝ、敬虔の念を以て登攀するが、歐人は高嶺を見て單なる土石の巨塊なりと認め、物質的に觀察してその高さや大きさを品評するに過ぎず、山に登攀すればこれを蹂躪し、山頂に達すれば山を征服したと稱して誇るのである。

要するに我は大自然を親友とし、彼は之を仇敵とする。我が藝術の總ての意匠には自然の心に觸るゝ妙諦が潜み、彼の藝術的意匠は自然の現象を物的に觀て思索するので、餘韻の妙が無いのである。

第四節 技 巧

日本民族の各方面の技巧に妙を得、殊に手工藝に於て斷然他に比儔なきことは世界の定評である。茲に試みに一例を擧げるならば、外人の日本の箆筒觀に關する實例がある。これは指物師の話であるが、元來箆筒は桐材に限るもので外國にはこの桐の優材は産せぬのである。この優秀なる桐材を以て、熟練せる指物師が丹念に作製した箆筒は、引き出しの抜き差しに際して些かの澁りもなく、實に薄紙一枚の間隙もゆるさぬ程巧妙にして、然も中は殆ど眞空である。従つて黴や害虫の發生する憂ひはない。或る外人がこれを實驗して一驚したのであるが、彼はこの箆筒の引き出しを抜き出して、それを又前後を逆に差し入

れて見た所、一毛の摩擦もなく、滑らかにすべり込むのを見て、愕然として恐歎したのである。彼は、これは指物師の精巧さによること勿論なるも、その半面日本の適度の湿度と桐材の程よくこれを含む特質のあることを指摘して、若し自分がこの簞笥を湿度の少ない歐羅巴へ持歸つたとしても、恐らくこの優秀なる効果は見られぬであらうと言つた。蓋しその言や適切である。これと逆に歐羅巴の道具類を日本に持ち來たつたとしても、その効果は失はれるのであり、家も亦た之と同様に、濕氣の多い日本に於て、濕氣の少ない所に適する西洋館に住ふならば、當然健康を害することは明白である。

建築關係に於て、名匠の妙腕を振ひたる木造建築の、指口や繼手等が、毛厘の齟齬も現はさぬことや、熟練の葺師が殿堂の屋根を處理して一糸も亂れざるが如きは、名建築に常に見る處である。而して斯の如き美果を得る所以は、我が工匠の天才的技能にも由るが、其の根本は、よく自然の妙諦を理解して之に

順應するが故である。

要するに日本民族は、總ての藝術に對して常に自在畫的圖案に基づき、歐羅巴民族は用器畫的考想に傾くのである。例えば左右同形の圖案を作るに、日本は必ずしも左右完全に同形なることを固守せず、故に含蓄ありて妙味を生ずるのである。絶対に左右同形なれば、形整ふに似て却て冷硬無味となる。即ち我は生きたる藝術となり、彼は死せる器械となるのである。

凡そ自然界を達觀するに、總ての物象は常に數理的の左右同形ではない。世界二十億の人間の容貌に、完全に左右同形なる者は一人もない。靈妙極微なる一點で、面貌の均齊を破る處に人間の生々しきがある。幾億兆とも數へ切れぬ草木の葉を見ても、終に一として正しく左右均齊なるは無いであらう。神の造られたるものに左右同形なるものは一つもないのである。

自然の妙を感得すれば、當然藝術の左右均齊を忌避せねばならぬ。左右絶對

均齊を要するものは只だ人工の器械あるのみである。

第五節 科學性

日本建築は古來番匠の技巧に由て造られたもので、科學は之に参加せずと思はれ來つた。外人は勿論、日本人にして猶ほ且つ漠然これを信じ來つた傾向がある。自己を知らずと云ふべきである。

日本の昔の建築家即ち番匠、江戸時代の制度に由る棟梁、大工、小工等が今日の所謂科學に對して、如何なる程度の科學的智識を持つてゐたか。之に關して遲まきながら漸次に判明するに至つて來た。それは今日の所謂サイエンスの形を以て、具體的に表はすことは困難であるが、近來國寶建造物の修理等に關

し優秀なる古建築を解體して精細に調査研究を遂ぐべき機會を得、又これ迄よく知られなかつた文獻、繪巻物等を詮索した結果、相當の資料を得たのである。今これを詳述することは不可能であるが、その一部を概説すれば、先づ第一に木材を處理する工具である。これは既に古墳の中より若干の大工道具が発見されるのである。即ち鎌、鋸等で、古墳時代に鐵を鍛へる學問と技術とがあつた事が明瞭である。而して時代が新しくなるに従ひ、木材處理の道具が着々進歩し來り、鑿、遣鉋、鉋、各種の鋸、鉋とその他墨壺、曲尺等無數の種類を生じ之を巧に運用することに由て、水際立つた優秀な仕事が行なわれる。工具の進歩が科學的研究に據るべきは勿論である。

次に上下縦横の部材の組合せである。歐羅巴の如く煉瓦や石を堆積するのは異り、継手、指口の精巧なる處理に由て部材を組合せるのであつて、この本格に完全に組合せたる構造は、吾人の想像し得る最大地震にもよく耐え得る。

完全なる木造構架が烈震の爲に潰倒した例は古來無い筈である。更に微妙なるは、日本の社寺宮殿等の建築は、多くは屋根と軒の線が曲線を描いて反るので、茲に立體曲線を現出し、之を構成する部材の處理は高等數學によらざれば計算し難いのであるが、日本には古來より規矩術と云ふものがあり、これを縦横に驅使して、極めて複雑なる問題を簡單に處理したのであつて、今日に至るまで連綿と傳つてゐる。歐土にも稀に反つた屋根、極めて稀に反つた軒はあるが、勿論日本の規矩術の如き特殊な科學的な方法は知らぬのである。その他構造的細部を精査すれば、驚くべき周到の用意を發見するが、例えば建築物の外觀の風貌が視覺の錯誤に由て歪めらるゝ虞ある場合は、巧にこの錯覺の矯正法を履行して居るなどは、實に感嘆するより外は無い。由來日本の番匠は、手工に巧みではあるが、科學的知識は無いと謂はれ、番匠も亦唯々として服従してゐたのは洵に残念の事である。

日本は大陸から游離した孤島であつた爲、科學の認識は充分有つたに係らず自ら之に注意せず、科學に該當する實語さへなかつたのである。即ち歐土に比して若干立遅れの感があつた。加之、江戸時代に於ける幕府の鎖國政策は、外には人民をして外國の事情を知らざらしめ、内には一步も進歩發達を許さざらんとしたのである。併し、江戸の花と稱する頻繁なる大火の如きに至ては放任し置くべからず、それは明曆の大火により、幕府は防火の設備の必要を感じたのである。それまで江戸の家屋は、寺を徐く外は總て萱或は板葺であつたが、その後種々工夫を凝らした結果、終に延寶年間に棧瓦の發明が成り、幕府は市民にその使用を奨励したが、遅々として進まず、東京遷都十數年の後草葺板葺の影が失せたのである。耐火建築として江戸には塗屋造又は土藏が出来、若干効果を示して居る。

耐震に關しては、江戸幕府の柳營に地震の間といふのがあり、極めて堅牢な

構造であつたといふ。安政大震の後江戸の醫家小田東毅なる耐震構造法を考案し、世に發表したが、その効果の程は未詳である。

要するに、日本民族は科學に迂なりとか、科學に適せずとか唱ふるは以ての外である。日本民族は太古より科學思想を有し、事物を處するに科學的方法を以てしたことは明白である。明治維新以後、僅かに八十年に滿たずして、日本科學が飛躍して世界第一流に進みたるを見て、諸外人は奇蹟として呆れてゐるのは頗る迂濶である。日本の今日の科學の進歩は、明治維新より始まるに非ずして、太古より始まりたる幾千年間の科學思想の蓄積である。何れの處にか全然科學の素養なき文盲國が、數十年にして世界第一の科學國に急進するの理あらんや。數學の關孝和、天文・地理・測量の伊能忠敬の如き、世界を驚倒せしむるに足るべき大科學者を知らざりし外人等は、慚死するとも猶ほ足らぬのである。

第六章 日本家屋の標準

第一節 平面計畫

以上述べ來つた所を綜合して日本固有の建築、殊にその根本となる住家の標準を概説すれば、先づその平面計畫は勿論地方により、住者の境遇に従つて區々であるが、大體氣候風土に則して平面計畫を樹てることである。その一貫せる方針は、家は原則として南向きに配置し、夏の炎暑を避くる爲に南北に風の吹き通すべき間取が必要であること、各室を開放して連絡し、大なる一室として用ふることが出来る様になすこと、椽側を設けて交通の便日射の嚴緩の調節を圖ること等にて、前述せる徒然草にもある如く、「家の作り方は夏を旨とするこそよけれ」といふことは永久の標語である。

茲に一言付言したきは所謂家相の問題である。家相が世に喧傳されたのは江戸中期以後の文化文政の爛熟時代以後であるが、今日に至るもこの迷信に因はれ、殊に鬼門を忌むの風習が残り、東北に家を張り出せば禍災を免れず等と稱し、氣に病む人が少くない傾向である。然し之は勿論愚にもつかぬ迷信にて、一切眼中に置くの要はない。併し人に人相あるが如く、家にも家相はある。人に明朝の相、隱微の相等がある如く、家にもこの種の相はあるが、それは外觀に屬することである。

家相の本家は支那に在るが、現時支那では家相を重んぜずして寧ろ方位に執着してゐるのであり、敷地に對する家の配置、門の位置、土地の高低と流水の方向等を八筭敷く論ずるので、日本の「寢殿造」などにもこの傾向が見えるがこの種の問題には餘り頓着せざるを宜しとす。

要するに、平面計畫は家の根本である。この計畫の如何に因て家の良否、善

悪、美醜が決定される。家を造らんとする人は、慎重熟慮の上にも、再三再四推敲して、萬誤りなからんことを期すべきである。

第二節 材料構造

次に主要なる材料は、住宅であれば勿論木材を良しとする。若し住宅が都會の中心地區に造らるゝ場合は、當然木造は許されぬので、不燃質物のコンクリート、煉瓦等を使用せねばならぬ。然るに植物性の木と、礦物性のコンクリート、煉瓦等とは全く反對の性能を有するので、純日本式日本趣味の家に於ては礦物性の材料は適せぬのである。即ち寒暑乾濕の調節にも、木材は礦物性のものよりも良好である。例之ばコンクリート等の壁體に一たび酷熱を浸透すれ

ば容易に去らず、一たび嚴しき低溫を吸引すれば容易に抜けず、人體に多大の苦痛を與へるのである。

構架材は筋目の通りたる針葉樹を最適とするが、裝飾的の材は任意にして可なり。屋根は萱を以て葺くのが最善である。萱の莖と葉の間には適當なる空隙を生じ、空氣の流通に由て自然に換氣が出来る。但し之が爲にはその家は空屋無住であつてはならぬ。無住空屋なれば空氣の流通を閉塞し、換氣の作用を杜絶するが故に萱は忽ちに腐蝕するのみならず、家屋全體が忽ちに朽廢するのである。これは單に萱葺に限るのではなく、瓦葺に於ても同様であり、家人が家を愛して絶へず清掃に努むることが何よりも緊要なことである。即ち家人が間斷なく働く事に由て家が永く保たれるのである。要するに木造家屋は家人の働く住家であり、礦物性の家は人を收容し、或は特殊の物を貯藏するに適するものといふも過言でなし。

木材は一般に弾力性に富むが故に風害や震害に對する抵抗力に強く、構架の方法に遺漏なければ、殆んど如何なる烈風激震にも耐え得ることは既述の如くである。日本の五重塔は古來未だ嘗て震災によりて潰倒した例がないが、烈風で潰倒した例は稀にあり、近くは大阪の四天王寺の五重塔が脆くも猛風に吹倒されたのである。併し、これは稀有の災難であり、之が爲に木造建築を危ぶむのは杞憂であろう。それよりも恐るべきは火災であるが、之に關して幾度か専門學者が耐火木材の發明に努力して、若干の成績を擧げてゐるが、未だ完全の域には進まぬのであるが、吾人は近き將來に、完全に近き成績を得べきことを翹望してゐる。

其他木造家屋に累を及ぼすものは虫害である。就中最も恐るべきは白蟻の害であり、寒地を除いて殆ど全土に布及しつゝあるが、これを徹底的に驅除することは殆ど不可能と見られる。

木造日本式建築の材料構造に關しては、なほ検討すべきもの少からず。而してその一部は礦物性材料に比して不利なる點を見るが、これは已むを得ざる運命であると思ふ。人に百藝に達する者なく、白玉にも微瑕はある。其長所は易めて之を適用し、其短所は極力之を補助し、古來の純正日本建築の缺陷を充填したいと思ふのである。

第三節 外 觀

凡そ建築の外觀は、その平面計畫と材料構造とより綜合され、自然に成立する形が最も自然であり、同時に最も美しいものである。強て奇を衒ひ妙を誇らんとして工夫を凝らせるものに碌なものはないのである。一見美なる如くにし

て直に見飽きるものである。「最も簡單なるものは最も美なり」とは古今東西に通ずる標語である。この意味に於て、日本の純眞簡素の農家等が、却つて華麗絢爛の巨構よりは美である場合が多い。日光の靈廟等はこの一例であり、彼の街耀なる極彩色は一見人目を奪ふに足るも、直に嫌惡を感じしむるのである。濃厚婉麗なる極彩色の繪よりも、一掃の水墨畫の方が遙かに美しい例が少からざるを思ふべきである。純日本建築はよくこの理に適合してゐるのである。

最近の獨逸建築の如きは、外觀頗る單調簡素なるも、之を以て直ちに無趣味なる醜建築と言ふべからず、彼の單調は必要上の單調であり、美觀を解せざるに非ず、故意に簡素を衒ふに非ず、質實剛健の氣を具體化せるものと善解すれば、彼も亦歎賞すべき好建築と稱すべし。「人は眉目より心」とかや、建築も亦然り。

建築の外観の眞諦はその建築の性質に投合するに在る。例之ば神聖なるべき建築は崇高森嚴なるを要し、靈威人をして不知不識その前に拜跪せしむべく、劇場は観客を引きつけるが如き表情なるべく、食堂は公衆をして垂涎を催さしむべく、牢獄は鬼氣ありて人をして戰慄せしむべし。住家に於ては、その千種萬様の風貌がその住者の人格、職業、趣味等より家庭の内部を反映するに至つて、建築も亦一塊の土石木竹の堆積に非ざることを曉るであらう。予は「建築はよく物言ふ」と信ずるのである。

第四節 内 容

建築の外観に對してその内容は之に相應したものでなければならぬ。建具、

天井、床、棚、窓等、さては調度什器類に至るまで家に相應しかるべきが當然である。不相應のものは善惡に係らず宜しからず、宮殿は宮殿に應じ、農家は農家に應ずることが望ましい。錦繡も身丈に合はざれば醜態であり、粗布も身丈に適ひ衣紋を正せば立派である。物質の粗もその處を得れば美しく、その處を得ざれば精巧も醜である。純良なる日本建築は、よくこの眞理を實踐して居るものである。

予は嘗て佛蘭西へ行つた時、巴里郊外のヴェルサイユ宮殿を見學した。この宮殿はルイ十四世が贅を盡した實に絢爛華麗の極を盡した建築で、少からず感歎したのであつたが、よと參觀者と自分の服裝に氣付いて見ると、普通の訪問服で特に粗末なものではないが、宮殿の豪華の前には一とたまりも無い。我等の姿の貧弱さは、我ながら淺ましい思ひであつた。この宮殿に飾られたルイ十四世の肖像畫の服裝は、既に世に周知の如く、錦繡の衣裳に金銀寶石の装具、

洵にこの宮殿に相應しい立派なものであつた。之と同様な日本の一例は、京都の二條城の大廣間一區の内容である。あの豪壯絢爛は、ヴェルサイユ宮殿とは全く調子を異にするが、その氣魄に於て我は遙に彼に勝るのである。予はこの大廣間の上段に端座して、諸大名等を眼下に見くだす將軍の服裝が如何なるものであるべきかを想像し、更に將軍に侍べる妻妾侍女の服裝を聯想して驚嘆したのであつた。

常に服裝斗りではない、室内問題であるから、事は甚だ複雑である。試に二三の例を擧ぐれば、床、棚を設備せる日本室に、椅子卓子を置くが如きは頗る不調和である。椅子に凭りつゝ、床の軸物を見るも面白からず。床の上に歐米産の如何はしい物件を並べるも苦々し。勿論家庭内の事は他の容喙を許さざる處であるが、餘りに調子外れの設備は人をして慳感せしむるものである。

第五節 庭園

既述の如く、日本の庭園は家と不可分の關係にある。庭は家の延長であり、家は庭に由つて引立てられる。これ日本建築の獨特の現象である。即ち住宅より庭を奪へば、その家の價値は殆ど零となるのである。

日本の庭の原理は、大自然の風光に憧がるゝ結果として、大自然の一端を人工的に模寫し或は改竄して創作を試むるにある。即ち日本庭園は一科の藝術であり、西洋のガーデンとは根本的にその範疇を異にするのである。

庭園の意匠は千狀萬態であるが、その廣大なるものは、假山泉池を作り、樹石を配置し、家との聯絡を旨として、家・庭を一團とするの構想である。外人

は殆ど全くこの理想を解せず、日本の造庭を以て遊戯的の徒事とし、一樹一石の趣味にも無關心である。彼は只だ物質的に庭を見るので、心から賞翫するのではない。

例之ば歐人は樹を見てその枝振り等は考へず、庭石を見ても、その石質を考へその重量を黙測する位の所に過ぎぬやうである。獨乙の名醫學者ローベルト・コッフ先生が、亡くなられる一年前であつたが、夫妻で來朝された際、東京の帝室博物館を訪問されたので、予はその説明に當つたが、その序に日本美術協會の立派な盆栽類を見せた。この盆栽の中に一きわ勝れた松の丈低く這ふが如くに枝を擴げたのがあつた。予はこれを見せて「美しい松であらう」と云つたところ、無口のコッフ先生は無言であつたが、夫人が之に答へて、「マー、何といふ慘酷なことよ」と顔を顰めた。コッフ夫人は言葉をつゞけて、「これだけの松を、すくすくと育て上げればよいのに、頭を切り枝を矯め、いぢめ通

して片輪な畸形兒にしたのは慘酷ではないか」と云つたのである。成程日本人の見る眼と歐人の見る眼とは斯くも違ふものかと思つたが、彼の言ふ事にも儘かに眞理があると考へた。日本人のやる事には、往々微細に過ぎたり末梢に走つたりする事があるのは、争はれぬ事實であると思ふ。

外國には日本の木振り枝振りなどいふ事は無い。従て生花などの技術も無い。彼等は花を愛するが、それは花その物を物質的に観るので、日本の如く心から観るのではない。彼は花を栽つて盛り花に造るが、それは器械的に水盤に盛り、花の色を賞し香を愛する丈けの事である。

日本を訪問する諸外人が日本の庭園や、地方の風景を觀て、之を賞美する者は必しも少なくはない。併し、その多くが深く感激し得ぬことは當然である。その一つの理由は日本の風景が餘りに小規模であるからである。彼等は巨大を愛し繊細を好まざる民族である。彼等が富士山を見て歡喜するのは、日本にも

珍らしく巨岳があるのに驚くのである。果せる哉彼の富士山を見るのは、その高さの大なること、その裾の廣いこと、その傾斜の曲線が略ぼ數理的のパラボラに合すること等で、之に對する何等の情もないのは當然である。我等の富士山を見て感歎するのは、日本の歴史を背景として、高山に靈ありとする信仰を伴ふに由り、不知不識山の神祕に打たれるのである。

第六節 日本建築の根本

以上略述せるが如く、日本古代の純真なる建築は、即ち我國の建築の根本をなすものである。之を人に譬へれば、幼兒の純真なる性格はその人の根本をなすものである。幼兒が母體より出で、呱呱の聲を擧ぐる時、既に一生の運命が

定まつてゐる。若し幼兒が充分な健康體であり、父母の哺育が完全であり、環境に何等の惡條件が無ければ、幼兒は眞つすぐに發育し、心身共に健全なるべきは當然である。天真爛漫、純情無垢の愛兒は、所謂「三つ兒の魂百まで」にて、生長するに従て益々その優良なる素質を發揮するのである。我が日本建築は即ちそれであり、世界無比の立派な建築を大成することは洵に故あることである。

諸外國の建築の發生狀態を見るに、之を人に譬ふれば、その父母は既に完全ならざる者多く、母の國土は或は酷暑であり、或は沍寒であり、或は不毛の地であり或は曉喃の地であり、父の國民は或は水草を逐ふて居を轉じ、或は隣邦と相闘きて食を争ひ、その環境を見れば、無數の異民族間斷なく、入り亂れ、互に争鬪を事として寧日なく、終に心歪み、意曲り、邪路に彷徨するに至るもの少からず。之に比して我が日本は、大自然の恩恵に浴して斯の修羅道の渦中

に授けられず、超然として正々堂々の途を辿り來りたるは何等の幸福であろうか。

我が幼児建築は、天恩の恵みに由て漸く順調に生長し、今日に至つて數千年、その開業より幾多の波瀾あり、若干の難關ありしも、建築は一路邁進して停頓することなく、所謂「一難を経る毎に一倍し來る」の理想を實現しつつあり。以下本章に於て之を解説す。

第七章 日本文化の三重相

第一節 日本建築の歴史

日本の歴史が世界無比の経歴を示すのは、抑々我が國體に基因することは爰に贅言を要さぬのである。建築に於ても、勿論之に因て世界無比の歴史を俾してゐるのである。

日本建築の歴史は、その發祥より今日に至るまでを三期に大別することが出来る。

即ち序論に於て述べた通り、日本建築の發祥は遠く神代に在り、その形式手法は既述の如く、自然に順應する純真無垢のものであつた。その後三韓より造船工や建築家が渡來し、仁徳天皇の宮中に樓閣を造營し、その他にも類例が

あるが、この三韓建築が普及された譯ではなく、一般建築としては古來の民家及び宮室即ち神社に關するものであつたと考へられる。これが幾千年繼續して益々洗練され、獨特の様式を大成したのが建築史の第一期である。

次で 欽明天皇の十三年、佛教と共に支那系の建築即ち佛寺が輸入され、その影響を受けたのである。佛寺建築の特色として、屋根を瓦で葺き、彩色、彫刻を施し、石を礎石とする等、在來の植物性一式の慣例に一大變化を來したのである。元來當時の支那系の建築材料は、木瓦混用であつたが、日本に於ては佛寺にありても瓦を襲用せずして、斷然古來の慣習に従つて、木材のみを使用したのであつた。現に大和の法隆寺の如きはその適例で、日本精神を根本として支那建築を攝取改竄したのであり、その風格は支那建築とは大に異なるのである。下つて奈良朝に於ては、當時の支那は唐の全盛時代にて、日本より遣唐使や留學生が派遣され、彼等によつて支那の文化は日本に喧傳された。東大寺大

伽藍の造營、同寺の盧舍那佛の鑄造等は之に負ふ所が少なくなかつた。しかしこの唐の影響も一時的であり、平安朝に入つて支那文化の日本化が擡頭し、藤原氏時代に至つて完全に日本化したのである。これは建築のみに限らず、例之は文字にしても、既往の漢字の外に新たに片假名及び平假名を創作せるが如きは偉大なる成績である。次で鎌倉時代に入り、支那より佛教の禪宗が移入し、宋文化の影響があつたが、特に重大なる變化もなく、室町時代を経て、桃山、江戸時代に至つて、茲に完全に日本化し、純然たる日本文化が榮えて明治維新に至つたのである。

支那五千年の歴史の中、第一期文化の最高峯は漢であり、第二期文化の絶頂は唐であつた。否、實に唐の文化は世界を通じて當時の第一峯であつたのである。この唐より日本がその文化を移入したことは、實は當時の亞細亞の全部及び歐土の一部の文化を、空手にして獲得した事になるのである。何となれば、

唐の文化は漢・六朝の文化を繼承した上に、更に新しき波斯・印度・大食等の最高文化を收受し、尙ほ大秦より歐土に亘る文化を併せ得たものであり、即ち當時の全世界の文化を吸収したのであつた。而して日本が殆んど手を濡らさずして唐文化を攝取したのは、第一に日本の地理的環境の賜物である。それは、古來世界の文化は東漸するといふ傾向に由り、歐土、極西アジア、中央アジア東部アジアより、極東に流れる文化の潮は、終に黃海を越えて日本に落着くので、日本がこれを容易に攝取したのは偶然に似て偶然でない。それは賢明なる日本民族が唐文化の優秀なることを看破するの明を以て、流れ來つた大陸の獲物を一ツも残さず一網の裡に捕獲したのである。しかも之を日本的に料理して舌鼓して存分に腹を肥したのである。

江戸時代末期には、英米等の外人が日本を窺察し、その手段として貿易を求め來つたが、國情紛々として要領を得ず、之を動機として江戸文化は終末を告

げ、茲に明治維新の新文化が現はれたのである。佛教渡來よりこゝに到るまで千三百十六年、これを第二期とするのである。第一期が建築の幼兒より國民學校時代ならば、第二期は中學より高等學校時代であり、第三期は即ち明治以後の大學時代である。

明治維新前後より歐米の文化が滔々として怒濤の如く浸入し來り、國情の大變化と共に建築も亦た著しく變動した。即ち極端なる米英文化崇拜によつて、獨り建築に限らず、日本の文化は根柢まで將に顛覆せんとした事もあつたのである。建築に於ては、第三期の経過を大別して五分期とすることが出来る。

第一分期は明治初年より同二十八年日清戦役の終り頃までにて、この間を「外國建築移植時代」と名づく。即ち諸外國の建築家が、思ひ／＼に自家の流義を以て、日本の地上に若干の建築を競争的に造つた時代であり、當時は殆ど全く純日本建築を忘れたものゝ如くであつた。外人の造つた建築物は今や殆ど

影を失つたが、なほ孤影悄然として遺る物が若干ある。これ等の中には、之を永久に保存して當時を攷ふべき資料とするに足るものもある。

第二分期は明治二十八年頃より同四十年頃までにて、この期間を「模倣時代」と名づく。この時日本の建築家は歐米建築模倣に熱中し、極力彼の建築に酷似せんことに努めたり、その成績は頗る良好にて、明治三十年頃には殆ど外國建築に髣髴たるものを得るに到りたり。

第三分期は明治四十年頃より大正十年頃迄にて、名づけて覺醒時代と稱す。この時日本は近く日露戦役に戦捷して意氣軒昂であり、外國建築模倣も業を了へた結果、茲に翻然覺る所あり、既往の外國建築の型を破つて、新機軸を創造すべく考案を試みたるは寔に喜ぶべき現象なるが如くなりしも、その新機軸とは歐米を超越したる根本的の新機軸に非ずして、歐米型を模範としつゝ、既往の作品の技藝末節に改案を試みんとするに過ぎざるが故に、その効果は寧ろ薄弱であつた。

第四分期は名づけて思索時代と稱す。それは大正十年頃より昭和七八年頃までの間であるが、これより先き世界大戦争が起り、大正八年に終結したが、これが爲に世界の思想界に大動搖が起り、建築界もその波に押されて混沌として落付かず。歐米の建築界は浮雲の如く且に一主義を説き夕に一學説を唱へたがそれが直ちに日本に反響し、日本建築家は送迎に違なき有様で、自己の確信を得ざるが故に、只だ思索に耽るのみである。

第五分期は昭和七八年以後今日に至る迄であるから、別に時代名は與へぬこととするが、先づ考究時代とも言ふべきであらう。さて以上述べた第三期の四分期の建築の變遷は、日本の公共建築例之は諸官衙、學校、病院、會社等々の建築を對象とするもので、日本式の木造住宅建築は殆ど全くこれと没交渉であり、時代を超越することは勿論不可能であるが、時代の惡潮流には囚はれず、

連綿として古來の傳統を守つてゐるのである。

更に注目すべき事は、第三期の建築は人に譬ふれば大學生の如しと言ひたるが、その教授たるものは、中學の教員たる唐には似もつかぬ歐米の先生である。この先生から學ぶべきものは果して何であらうか、よく考へねばならぬ事である。大學生諸君は春秋に富む、他年日本建築是を確立し、建築の爲、國家の爲に貢獻さるべきである。

第二節 三期の共存共榮

以上日本建築の歴史を通觀して見るに、茲に一見不思議なる現象を認める。即ち建築史の三期三様の建築が、今日に至つて尙連綿として共存共榮してゐる

事實である。

試に日本の今日の建築界を見渡せば、一見頗る雜然たるが如くに見へるであらう。大都市に於ては、大厦高樓が櫛比してゐるが、夫は歐米式のもので、所謂第三期の建築である。然るにこれと隣接して、昔ながらの支那の感化による佛寺や塔が聳えてゐる。それは所謂第二期の傳統である。更に又第一期の日本固有の神社は、昔ながらの様式のまま、で佛寺と相並び、三期三様の建築が睦ましく相携へて古へを談つて居るが如くである。郊外には素朴な農家が風情面白く林野の中に隱見してゐる。この複雑な建築の混在を何人も怪しまず、當然の現象として問題にせぬのは何故であるか。夫は餘りに當然と考へて居るからである。併しよく考へて見ると、これには實に驚くべき重大なる理由が存するのである。

全國には政府に於て登録せる神社だけでも約十一萬以上あり、無登録のもの

は殆ど數へ切れぬ。これが國民崇敬の中心となつて彌榮えに榮えてゐるのである。佛寺は現に七萬餘を算ふるが、之に屬する棟數は少くも百萬を突破するであらう。而してそれ等は國民の信仰の中心となり、教化の事業に務めてゐる。敏達天皇の御代に佛教をめぐる物部守屋、蘇我馬子の争ひがあつたが、之は神佛兩派の争ひではなく、兩氏の政權争奪をめぐる小競合であり、聖德太子は深い思召から佛教を認容されたが、同時に神社崇敬を奨励され、國民は悉く太子の恩命を奉戴したのであり、後に神佛混淆の形ともなつたのである。斯くて神佛兩道は相提携して些の摩擦も無く、建築界に於ても、三期三様の別はあつても一心同體の精神を以て相依り相扶け、共に榮へつゝ今日に到つてゐると云ふことは、洵に驚くべき現象であつて、日本建築史に燦然たる光輝を放つてゐるのである。

第三節 世界無比の現象

前述の三期三様の建築の共存共榮といふことは、實に世界無比の現象である。世界各國の文化史を見るに、數千年前に發祥した古代文化は殆ど總て湮滅に歸し、その上に新しい文化が次から次と興るのが普通である。

例之ば世界最古の國たる埃及の第一期文化は即ち古代宗教文化で、スフィンクスやピラミットの時代であるが、それは羅馬時代に滅亡し、その殘骸の上に基督教文化が建設された。之が第二期である。然し之も又間もなく滅亡し、その枯骨の上に更に第三期の回教文化が興つて今日に至つたのである。

希臘古代の第一文化は華やかなるもので、アテネのアクロポリスに鎮座せる

バルチノンの祠堂は、世界第一の美建築と持て囃されたのであるが、今は廢墟の上に遺骸を曝して居るのである。爾來幾變遷、希臘の末路は憐むべき状態に陥つてゐるのである。波斯は如何、これも同様の運命に翻弄され、昔時キロス、メリウス等の全盛を誇つた第一文化も、スサやペルセポリスの廢址に枯骨を残すのみである。第二文化のササン朝の新波斯も回教徒に滅ぼされ、遺骸は只だ斷片的に散亂し、而して第三文化は今日の回教波斯であるが、今や頗る振はぬ有様である。その他支那然り、印度然りで、何れも同轍を履んでゐる中に、唯日本のみが太古以來の文化が儼然として生きて活動してゐるのは何故であるか。之は云ふまでもなく日本獨特の國體と歴史の致す所である。

凡そ一國の文化が失はれる動機に三つの重要な原因がある。第一は敵國の爲に強制的に破壊された場合、第二は國內の革命の爲に既往の文化の蹂躪された場合、第三は國力衰微して自ら倒れた場合である。然るに日本は未だ曾て外敵

の侵入をゆるさず、夷狄蒙古の侵入も、御稜威の然らしむる所これを立所に一掃した。國內に於ては、痴僧道鏡の僭越も清磨の忠節はよくこれを卻け、平將門の野望も物の數でない。恐れ多きことではあるが、偶々 天皇の宸襟を惱まし奉つたこともあれども、國體の然らしむる所國礎は微動だもしたことはない。更に況や近代に於て日清・日露の戦に大捷し、今また大東亞戦争に赫々たる戦果をあげ、日本の國運は隆々として進展しつゝあり、數千年を経て尙ほ青壯年の意氣に満ちてゐる。即ち三期三様の文化が共存共榮する所以である。

三期三様の系譜を分解すれば、第一期の潮流は、開闢の太古に發源し、最下層の深床を流れ、滾々として今日に及んで居り、その水は透明清純である。第二期の流れは、佛教渡來に湧き出で、中層の床を奔りて今日に及び、その水は支那文化の紅色を混じた結果、美しい淡紅色となつた。第三期の水源は明治維新にあり、歐米文化の濃厚なる雜色を交へ、沸騰として上層の床に漲つてゐる。

吾人は今や第三期の最上層の上に立つてゐるので、天下泰平の折ならば、第二期第一期の深床には兎角留意せぬのであるが、一旦事あれば地層の動搖に由て下層の潮流は表面に迸り出で、事態益々重大なれば地下の動搖益々激しく、第一期の清水は殻を破つて表面に噴出するのである。我國の現今の状態は正に是である。建築に在りても亦た第一期の清泉に洗はるべき機運に遭遇したのである。

第四節 明治以後の現象

明治以後の建築は實に複雑怪奇にして、簡單なるものではない。明治初年に歐米文化が流入するや、日本はこれに感服し、所謂第三文化が猛烈なる勢で撞

頭して將に既往の文化を一蹴せんとする勢もあつたが、幸にして正道を愆らさず、着々として今日に至つたのである。

明治以後の歐米文化の影響は、今日より見れば頗る遺憾なるものがあるが、時勢の然らしむる所止むを得ない。この例は第二期の唐の文化流入の際にもあり、奈良朝に於ては宮殿の規模様式や服裝の上にも支那風を取り入れたのであつたが、年を経るに従つて漸次に日本化したのであり、鎌倉時代以後移入した宋明の文化にしても、亦た久しからずして完全に日本化されたのである。由來外國文化の影響を受けてより、百年を経過して見なければ、その日本化の成果は得らるゝものではない。明治維新以來七八十年にして、第三期の文化を完全に日本化することは無理であるが、「歴史は繰り返す」といふ常套語が正しければ、早晚日本化する時期に到るのであると思はれる。勿論、將來は逆睹し難い、何人も具體的に長き將來の状態を豫言し得ないであらう。但し、第三期の

歐米的文化が完全に日本化されたとしても、之が爲に古來の第二、第一兩期の文化は失はれる筈はないと信ずる。殊に第一期文化の永久に榮え行くべきことは、何人も疑ふべき餘地は無いのである。

この事實に由つて生ずる重大現象の一つは、現今の社會生活が總て二重三重の複式である事である。日本文化が三期を通じて三様である以上、この現象は當然の結果でなければならぬ事になる。例之ば衣に於ても和洋兩式の併用が行はれ、食に於ては和漢洋の三重となつてゐる。言語文字等に於ても同様で、之を單式化することは不可能であると思ふ。或は多元制は國運の隆紹を妨ぐるものとし、徹底的に單式化を勵行すべしと云ふものもあるが、これは所謂机上の空論で、日本古來の文化の推移と、その微妙なる一般國民の思想、開闢以來慣用された牢乎たる生活様式等を抹殺せんとするは思はざるの甚しきものである。單式は複式よりも簡にして便なりと言ふが如きは蓋し小兒の片言である。

う。鼎は三足にして立ち、人は双脚にして立つ、單脚にして立たんとするものは夫れ何物か。

試に建築に就て見るに、一棟の小屋を作るにしても、今日に於ては古式の純正日本式の家に住はんとする者は一人もなく、之を造らんとする者もないのである。そこには必ず第二期或は第三期或は二、三兩期の文化の分子を取入れねばならぬ。卑近なる一例を擧ぐれば、屋根の瓦葺は支那より傳來し、窓のガラスは西洋よりの輸入であつた。調度什器等に至つては、その大多數は第二第三兩期の起源に據るものである。しかも、洋館を造つてその内に疊を敷かざれば住ひ難しとする者も少なからず。即ち單式を以て徹底せんとするもの如何に困難なるかを知るべきである。

要するに今日の第三文化の効果は未だ的確に判定するに至らず、假すになほ歲月を以てして充分に検討を遂げ、その有効と認むべきは之を助長し、その弊

害と認むべきものは之を矯正し、第一、第二の文化と相提携して國運の發展に
貢獻せんことを期待するのである。

第八章 純正日本建築の實例

古今の日本建築の中に於て、その最も純正にして且つ優秀なるもの、即ち日本建築の真相を發揮して居るもの、或は之に近きものは今なほ少からず遺存して居る。茲にその建築の種目に従つて之を配列し、その性質、意義に就て要點を述べたいと思ふ。

第一節 古代の住家

日本開闢當時の建築が如何なるものであつたかは不明である。先住民族の穴居に就ては考古學者の研究に任せることとする。日本民族の住つた太古の家は如何なる規模であつたか、之は的確に徵すべき遺構も文獻もないが、略々想定は出来るのであり、古來匠家の傳へる所謂「天地根元宮造」なるものが之に近

いと思はれる。

凡そ家を造る動機は生活を入れる爲であり、手近にある材料を以て身を容るに足る構架物を造るのが當然である。即ち最も手近にして豊富なる材料、即ち木材を以て構作したのである。その方法は天地根元宮造に見るが如く、先づ二本の丸太の根本を地に掘り入れ、幹を合掌に組み、組合つた所を蔓、葛緒、栲繩などをもつて結び、三角形の枠を作るのである。この三角の枠を前後二箇所に立て、一方から一方と棟木を渡し、合掌から合掌に數本の小舞を架け渡し、その上に草を葺いたのである。合掌の上端が屋根を貫いて高く空中に突出するのが後の神社の千木である。斯て出来たブリズム型の小屋の床は土間であり、入口には簾を垂れたものゝやうである。住者の日常の仕事は専ら戶外にて作業し、日暮れて小屋の内に寝るといふ簡単な生活であつたに相異なる。●後世合掌の交叉する所に一本の柱を立て、更に左右の合掌の下に柱を立て、柱は梁、貫を

以て連結し、床を高くして濕氣を防ぐに至つて、やゝ形の纏まりたる建築が成立したものと考へられる。これが更に進歩したものは即ち宮室及び神社である。

原始的の家屋の他の一種は校倉造である。この造り方は、丸太を積み上げて壁體を造る方法であるが、丸太の轉落を支へる爲にその左右に杭を打ち込み、その間に丸太を落して行くのである。斯くして四角形の壁體を作り、その上に屋根を架けるのである。やゝ技術が進歩すれば、丸太の上下を平面に削つて轉落を防ぐことを考へる。この頗る簡單なる工作が、天地根元宮造と何れが先に發明されたかは明白ではないが、現今でも神社佛寺の倉庫として使用されて残つて居る。それは最も發達した形式で、四壁の丸太を工作して正しく積み上げ、個々の丸太は井籠式に噛み合はさるゝので、校倉の名がある。校の字は木の交はる意を示すのである。校倉造は、苟も樹木の鬱生する地方には、世界到處に在る。日本は勿論、支那の西南隅、印度のヒマラヤの山間、シベリヤ、

及び露西亞、スカンデネヴィヤ、瑞西、北米のロッキーマン地方等の山國の農家は皆この形式で、所謂ログ・ハウス即ち丸太小屋である。

しかし日本民族の生活状態から、日本の住家としては天地根元宮造の方が適應し、校倉造は倉庫として物を貯藏するに適してゐるのである。何となれば、天地根元宮造の發達せるものは、柱本位の構造で垂直に聳立し、校倉造は横材本位の構造で水平に匍伏する形を取り、その品位に霄壤の差がある。然るに木材の性質として、堅に收縮すること少くして横に收縮することが多いのであり、校倉造の壁體の丸太は空氣の乾濕に應じて常に膨脹收縮し、丸太の間に生ずる間隙が一伸一縮して自動的に空氣の呼吸の作用を起すのである。即ち乾季には丸太の間隙が開いて乾氣を室内に誘導し、濕季には丸太が密着し、濕氣を遮斷して室内に入れぬのである。即ち校倉造は倉庫として理想的の構造である。現今の奈良の東大寺の勅封藏即ち正倉院は、聖武孝謙兩天皇の御物を勅封す

る寶庫であり、その構造は理想的の校倉造である。その他神社佛寺にこの種の寶庫が若干あり、その他琉球、臺灣等にも貯藏庫として残つてゐる。なほこの系統の建築は、遠く南洋諸島にも散見するのである。

之に對して天地根元宮造は最も簡單に風雨を防ぐべき装置で、住家に適するものである。卑近の例を挙げれば、農村に於ける穀物小屋から豚小舎、肥料桶の屋根等皆この方法によつてゐる。茲に余の知れる限りに於て、只だ一つの立派な實例は、伊勢の二見ヶ浦にある御鹽燒所である。これは御鹽殿神社に附屬したものであるが、形は天地根元宮造であり、材料構造は既に太古の手法ではなす。

天地根元宮造からやゝ發達したものが、古代の農家であることは明瞭である。現今では古代の型は殆ど失はれてゐるが、最もよくその形を残して居る實例は飛騨の白川村にある一群の民家である。この民家は等邊三角形の急勾配の

高屋根で千木はないが、その屋根は或る家では軒先きが殆ど地面に接せんとするまでに延びて來てゐて、實に美しくも又昔ゆかしい風情である。

我々は地方農村に於て、丘陵田野の間に樹林を背景とした草葺の農家を見るのであるが、これ即ち純正なる日本建築の代表的なるものである。濃やかにして美しい小規模の環境の裡に、之とよく調和した木造草葺の小屋が何の屈托もなく街氣もなく、頑是ない幼兒その物の如き天真爛漫の姿を以て立つてゐる。實にこれ純真無垢清淨の純正日本建築である。況やその住者が、富貴を求めず榮譽にあこがれず、只だ自然の命に順ひ、黙々として農事に精進するに至つては洵に人と家との調和の極であると感じられて尊い。譬へば美辭麗句を並べて奇巧を衒つた長篇の詩よりも、無造作にして虚飾なき十七文字の俳句が如何に美しくも亦た興味深きか、所謂賤が伏屋、蛋の苫屋の茅屋が即ちこれである。

第二節 神 社

人若し地方を周遊すれば、野と云はず山と云はず、田畝にも村落にも、點々として一叢茂る大小の樹林を見るであらう。この樹林の裡に、殆ど常に大小各様の昔床しい特殊の古建築を見出すであらう。之が即ち神社であり、鳥居、玉垣、その他の設備が之に随伴するのである。

凡そ國土の地相は時々刻々に變化する。山は崩され谷は埋められ、田畝變じて市街となり、河海は化して平野となる。この間にあつて彼の神社とその樹林のみは創建以來現地に在つて現状を保ち、年を重ねる毎に森嚴を増してゐる。これは由々しき重大なる現象ではないか。謹みて鳥居の内に參進して社殿を拜

するならば、素木の檜の香高き御柱、御屋根の頂に高しる千木勝男木、さながら太古の倂に接して不知不識御前に拜跪するのである。この神社こそ皇祖皇宗天神地祇等を奉祀する靈殿にして日本國體の淵源である。之を建築的に説明すれば、本來は全部清淨な植物性の材料を以て造り、其の構造は一木と雖もよくその使命を全うして、他の建築に屢々見る假偽の構造がなく、その風姿は簡潔端正にして些の煩縟猥雜の點がない。この神社建築こそ洗練された太古建築と云ふも不可ならず、洵に日本建築の根本を成すものである。

凡そ世界の何れの國でも、その太古に於ける宗教的信仰は、自然物崇拜と祖先崇拜であつた。歐羅巴人は之を原始宗教であると云ふ。しかし日本に於ては天地日月を崇拜するに磯城神籬ひまらぎの制あり、磯城は神聖なる祭壇を石を以て區劃したもので、この神聖なる地域の上に神靈を請ずる爲めの樹を植ゑる、これが神籬である。即ち祭祀は磯城の上に、神籬を對象として行はれるので、こゝに

は神社としての建築物はないのである。祖先崇拜は、元來人倫の道より出たもので、祖先の恩、その遺徳を永久に忘れぬ爲にその靈を祀るのである。この場合に於て奉祀の爲に建築物を必要とする。即ちこの建築は祖先の住まつて居られた家と同じ建築を造りてその神靈を安置し、恰も生きて祖先が在すが如き信念を以て之に奉祀するのであり、なほ本格的に竭すならば、朝夕の挨拶即ち祝詞を述べ、御饌みけ即ち食膳を供へて奉仕するのである。「神を祭ること神在すが如し」といふは即ち之である。これが神社である。

神社の建築は太古の建築そのまゝであらねばならぬ。それは天地根元宮造の發達して大成せるものである。神社は御宮であり、天皇の御住居も御宮である。宮の意義は「みや」即ち御屋みやで、神社も宮室も均しく「みや」である。

以上の次第であるから、神社建築殊に皇祖皇宗天神地祇を奉祀する建築に於ては、必ず太古の形式に據り、妄りに之を取捨選擇し、或は自家の改案を試む

るが如きことを戒めねばならぬ。神社を普通の住家等と同一視してはならぬ。如何に壯麗にして善美を竭しても、その構想に一點の缺陷があつたならば、必然神慮に適はぬのである。神社は神靈の爲の建築で、參詣者の爲でも、建築家の爲でもないことを牢記せねばならぬ。

神社の草創は何時であるか、之は傳記より見れば出雲大社が最初であると思はれる。出雲地方は神代に於て素盞鳴尊がこの地を平定して領土とされ、尊の後裔大國主命が之を受継ぎたまひ、山陰北陸地方を領されて居つたが、天孫瓊瓊杵尊よりの國土讓渡の御勅命に従ひ、領土全部を奉還して御自身は杵築の地に隱退せられた。そこで瓊瓊杵尊は大國主命の爲に永住の宮殿を造りたまひしが、之を天日隅宮あめひすみみやと申すのである。この宮が後にそのまま神社となつたのが即ち出雲大社である。

この神社の平面計畫は太古のまゝ現今でも残つて居るが、その全體の外形は若干變化してゐる。平面の形は正方形で四方二間であり、中心に太い心柱が立ち前面向つて右に入口があり、殿の周圍に高く椽が廻り、入口の前に階段がある。即ち天地根元宮造の發達せるものと解し得るのである。現在の出雲大社の屋根は、直線であるべきがやゝ曲線となり、之に準じて千木は曲線の破風となり、所謂置千木が棟の上に載せられて居る。即ち出雲大社の最も重大なる遺蹟はその平面計畫であり、之に就ては頗る興味多き且つ緊要なる問題もあるが、今は之を省略する。

出雲大社の建築を「大社造」と稱するに對し、伊勢の大神宮の建築様式を「唯一神明造」と申すのである。伊勢神宮の御事は、申すも畏き事で、御遠慮申し上ぐべき筈であるが、御許しを得て若干申し述べるのである。神宮は、昔は大廟と申して居たが、それは支那の文字を襲用したので、日本には適中しないのである。餘談ながらその要點を申せば、支那に於ては周の時代より清朝まで

大廟といふ物があつた。それは支那に興つた各國の君主が自分の祖先を祀つた廟であるが、一體支那とは何であるか。それは確乎たる一大國ではなく、漠然たる土地の名である。その各地方に分裂割據して建設した國は、五千年來大小無數で、殆ど計算に勝へられぬ。しかもその國を建てた者は、漢民族を主とし、東夷西戎北狄南蠻の無數の異民族の混淆であり、各自國號年號を稱し、帝王・皇帝等の名を僭し、永きは數百年の社稷を保つも、短きは且に興つて夕に亡ぶのである。然るに國民は連綿として今日に至り、變轉究まりなき國情に對して全然無關心である。斯くて各君主の造つた各地方の大廟は、その君主の私有物で、國民とは毫も關係なく、國民は之に近づくことが出来ぬが、近づかうとする國民もない。然るに日本の大廟は祖國の大廟にして同時に國民の大廟であり、國民は大廟に參拜を許され感泣を以てお伊勢詣りに趨るのである。

支那には帝王を祀る廟もある、例之ば堯帝廟、禹王廟、昭烈廟の如きである

が、前述の理由により、一般の國民とは没交渉であり、日本ならば官幣社に列せらるべきものが、僅かに地方の土民が稀に賽錢を捧げる位である。その他支那には夥しく名臣功臣等の廟があるが、これは日本ならば別格官幣社に列せらるべき筈であるが、前述の通りで、僅かに地方的存在として、政府は之を顧みぬのである。例之ば宋の忠臣文天祥、張世傑、陸周夫を祀る廟が廣東省の崖山に在るが、宋亡びて元の世に至り、元はこの三人の忠臣を逆徒と認めて顧みなかつた。元亡びて明に至り、三傑を篤く祀つたが、明を亡ぼした清は、三傑と恩怨なき爲めか、彼等の廟を無視してゐる様に見へるのである。

内務省の神祇院は神社を取扱つてゐるが、伊勢神宮は神社とは認められず、「神宮及び官國幣社」と明瞭に區別されてゐる。即ち神宮は神社の上に立つものである。神宮の御由緒は、今更贅言を費すべきでないが、天照大神が天孫瓊杵尊を高天原より豊葦原瑞穗國に降下せしめたまひし時、「この鏡を見るこ

とわれを見るが如く、齋き奉れ」と仰せられて八尺瓊勾玉、天叢雲劍と共に八咫の鏡を御授けになられ、尊より御歴代の神々、天皇を経て垂仁天皇の御代に、御同室は神器を瀆す畏れ多しとして皇女倭姫命に御命じになり、神器奉安の地を選ばしめ給ひしが、姫命は諸國御探檢の末、伊勢の國、度會の郡、五十鈴川の上流に宮城を定め給ひ、茲に皇大神宮の御造營が出来たので、神鏡はここに遷座され、倭姫命は御生涯を齋宮としてここに御奉仕されたのである。その後、雄略天皇の二十二年丹波より豊受大神を遷されて、皇大神宮を内宮、豊受大神宮を外宮と稱し奉ることになつたのである。

皇大神宮の御正殿が出雲大社のものとやゝ異なる點は、出雲大社では平面が正方形であるのに、皇大神宮の方は横に長く、正面三間側面二間である。天武天皇の御代に二十年毎に式年御造替の制が定められ、持統天皇の御代に第一回の御造替が行はれて以來、今第五十九回の御造營が進行されてゐるのである。

勿論何時の御造替にも、絶対に古式を變替せざる制度であるから、持統天皇の御代の御姿がそのまま、今日に残り傳はり、今後も永久に續かねばならぬものである。之は國體の根本として洵に尊い極であるが、建築として見れば如何であらうか、之を學問的に見て建築的價値を批判することは洵に畏れ多いことである。若しゆるさるゝならば、一言にして「建築的に見て、洵に合理合法にしてしかも善美である」と申し度い。

嘗て獨乙の建築家ブルーノ・タウトは、日本建築を見學して皇大神宮に參拜した時、非常なる感激を以て「これこそ日本建築の神髓のみに非ずして、世界の建築の神髓である」と叫んだ、予が試にその理由を問ふた所、彼は、先づ材料の美しさとその運用の巧を擧げ、構造の合法的にして少しも無駄なく、全體の構成が極めて簡潔で、そこに崇高の美があるが、茅屋根の調子や軒廻りの處理は特に敬服させられる、要するにこれ日本建築の神髓であると思ふと答へたの

である。總じて歐米人の日本建築評は見當違ひが多く、或は佞辯を弄し、或は不得要領であり、或は急所を外れた愚見であり、殆ど問題にならぬのが普通であるが、タウトの言ふ所は慥かに急所の一部に當るもので、近頃、具眼の建築家と認められる。

伊勢兩宮に關することは、畏れ多いことであるから、謹みてその建築に關する解説や批判は差し扣へるのであるが、その建築の様式は「唯一神明造」であるが如く、伊勢兩宮の建築に特殊のもので、他にその模倣は許さぬのである。只し「神明造」は唯一神明造とは多少の差異があるので、任意の意匠に由て、任意の神社を造營するに妨げない。東京都に於ける最大なる「神明造」は九段坂上の靖國神社の本殿である。

その他神社建築の種類その様式手法等に就ては、一日にして盡すべからず、茲に之を省略するのである。

第三節 皇居

皇居の事は申述ぶるも恐れ多いが、太古の皇居の御姿は、太古の神社の形と同様であつたと想像し得るのである。即ち古代の皇居は、勿論素木の檜造りである。その屋根に千木勝男木が有つたことは日本紀 雄略天皇の條に見ゆる一節に據ても明瞭である。それは、雄略天皇が皇太子にあらせられた御時、大和に御住ひあらせられ、それより河内國に御出ましになる途中磯城を御通過になつた處、この縣主の家の棟に勝男木を載せたるを御覽になり、屋根に勝男木を載せることは、天皇の宮居に限るのであるを、縣主の如き一地方役人が、之を犯したのは僭上の沙汰であると御咎めになつたと申す事が見える。之によつて

も、神社と皇居とは同型であつたと云ふことが出来るのである。

その後佛敎渡來に伴ひ、漸次支那建築の一部が皇居にも適用されることゝなりたることは、既に 持統文武兩天皇の藤原の宮の規模に據て推測されるのである。藤原宮の遺跡は曩に足立康博士に依て充分に研究され、その遺趾は略ぼ明瞭に解決された様である。この支那文化の攝取は時と共に増進し、殊に奈良時代に於て著しく、聖武天皇は、奈良京に住ふ五位以上の官吏及び庶民にして富裕なるものゝ家は、柱は丹塗りとし屋根は瓦葺とすべしと勅命された程であるから、天皇の宮殿も當然丹楹青瑣の支那式の建築であつた事と想像されるのである。桓武天皇が平安京に奠都され、大内裡及び内裡に經營された殿堂の美は周知の如く、就中八省院の規模は、支那の長安に於ける宮城の構想に髣髴たるものであり、その主座たる大極殿の偉容は、丹楹碧甍、朱欄青瑣、金礎玉礎の儀装に由て發揮されてゐる。その後藤原時代末期に至り、大内裡は凋落して

里内裡となり、鎌倉時代に入りて皇室振はず、皇居の規模は漸次に萎縮し室町時代の後半期に至つて其極に達し、終に式微の状態に入りたることは、誰か涙無くして語るべけんや。窮すれば通ずとかや、桃山時代に入りて、織田信長禁理修復を行ひてより、豊臣秀吉再び皇居を改築し、徳川家康三たび之を擴張し九重殿門の威儀復た整つたのであつた。江戸時代に入りて、皇居祝融の災に罹り、松平定信(白河の樂翁公)奉行として之を改造し、その制度を平安大内裡の型に復原したのが即ち寛政御造營である。次で又皇居炎上の災あり、再び寛政の式に由て復舊したのが安政御造營であり、現在の京都御所は即ち之である。

既往の皇居建築の遺構として、京都の仁和寺の金堂は、豊臣秀吉が奉仕した皇居の紫宸殿を移轉したもので、多少の補修を加へて金堂としたものと云はれる。京都の大徳寺の唐門は徳川家康が奉仕せる皇居の正門であつたものと云はれて居る。

皇居建築の経過は日本の歴史と共に盛衰の運命を共にしてゐることは、洵に感慨深くも亦た恐懼に堪へぬのである。申すも畏けれど、太古より今日に至るまで、各種の建築が、歴史に順ひ歴史に逆らひ、紛々として己れの欲する所に趨らんとする間に、獨り皇居建築のみは、常に歴史に即して離れざるは何故であるか、吾人は襟を正して熟慮せねばならぬ。

第四節 佛 寺

日本の古代建築は、純粹なる日本建築として長年續き來つたが、欽明天皇の十三年百濟より佛教の渡來と同時に、支那系の建築の影響によつて變化を來したのである。しかし之が爲日本建築が亂されたのではなく、一段と光彩を放

つに至つたのである。

支那建築は日本建築とは性質の異なるものであり、日本建築の植物性一式で單純なるに對し、支那建築は古くより木、土、石混用を以て出發し、材料異なるに從て構造様式も亦た異なるのである。日本はこの支那建築を奴隸的に模倣したのではなく、物質的には支那建築の一部を攝取したるも、精神的には飽くまで日本精神の基礎の上に立つて處理されたものであつた。従つて以前の建築美とは別の華麗さが加はり、非常に活氣ある力強い建築を現出したのである。

佛寺建築の濫觴は佛教渡來直後の向原寺であるが、その本格の七堂伽藍の規模を大成したのは、察するところ 用明天皇の二年に攝津に建立された四天王寺を嚆矢として、崇峻天皇の元年（或は推古天皇元年とも云ふ）に建立された大和の法興寺、推古天皇十五年に成る大和の法隆寺である。之等の伽藍建築は、曾て百濟の造寺工、瓦博士等の設計施工に成るものと考へられ「百濟様七

堂伽藍」と稱せられて來たが、之は實際に百濟の七堂伽藍と比較調査したる結果ではない。法隆寺伽藍の計畫及び建築の様式の如きは、我等の聖德太子の獨創に由つたものであることを確信するのである。

法隆寺草創の由來に就ては、幾多の學說が混交し、未だ完全に確定されざる状態にあるが、現存の堂塔の建築は、千三百餘年を経過した日本第一の古建築であり、その建築の端正にして嵩高なることも亦た古今に絶する名建築である。而も之を支那の佛寺建築と比較すれば、一見相似たる如くにして實は著しき相違があり、百濟建築の襲踏にもあらず、支那建築の直寫にもあらざることは歴然として明白である。即ちこれ日本人が日本精神を置めて經營せる日本建築である。

法隆寺建築の細部には多くの外來の影響が潜在してゐる。例へば屋根の反り、勾欄の手法、料拱の組織等は支那の示峻に由るものであり、柱のエンタンス、忍冬唐草の文様等は希臘の影響であり、天蓋は中央亞細亞に始まつたものと見るべく、その他西方亞細亞、波斯、印度等の影響は、濃淡の別はあれども、均しく法隆寺に集注し來つたのである。之を適宜に混用した手腕は實に驚嘆に値するものであり、慥かに世界無比の妙技である。

法隆寺に就て言はんと欲する所は限りなく多いが、その第一は木造建築にして千數百年の星霜を経て、なほ遺存してゐることは世界無比である。これは木材の優良にも由るが、それより聖德太子の徳望であらう。奈良地方の古刹が多く廢滅したのは、一つは心なき徒輩が修理保存を怠つた爲め、一つには兵燹に罹つて焼亡し、或は破毀された爲である。然るに法隆寺は、聖德太子の權化とも仰がれ、萬民の永久に景讚する所であるに由て、之を毀ち之を焼くが如き狼藉を働く者は一人も無いからである。次に特筆すべきは金堂の壁畫である。この壁畫の由來や年代は、今なほ明瞭を缺いてゐるので、茲には自論を主張しな

いが、兎に角壁畫の藝術的價値は斷然世界に冠たるものである。印度アジャンターの壁畫も世界的の名畫と呼ばれてゐるが、法隆寺の壁畫は之に比して遙かに優秀であることは、斯道の専門家が一齊に肯定してゐるのである。その他法隆寺に屬する多數の佛像佛具等は、何れも世界に誇るべき鬼工神技であり、實に日本の國寶たるのみならず、世界の至寶として尊崇すべきものである。

日本の建築はこの新式建築を得て頓に活氣を呈し、寂莫の感があつた古代建築界を一舉にして殷賑豊富たらしめ、之に關聯して各種の藝術文化を興隆せしめたのである。

聖德太子が何故佛教を御取入れになられ、何故に佛教建築に斯くまで御心勞なされたか。私は簡単に所信を述べたいと思ふ。

それは一言にして曰はゞ、太子は日本文化の向上を圖る爲に熱誠を竭して御活動なされたと申すのである。元來日本開闢以來、國民は純眞無垢の心情を以

て、安らげく生活し、樂しく作業し、例之ば幼児が父母の膝下に嬉遊するが如き情態にあつたと思はれる。即ち海外の事情にも精通せず、従つて文化としても極めて單純であつたに相違ない。偶々三韓から若干の文化が贈られても、それではなほ足らぬのである。茲に聰明叡智にあらせられた聖德太子は、三韓を透して支那の文化の隆盛を感得され、幼兒時代の國民を、國民學校に入學せしむべき御計畫を立てられ、始めは百濟から傳來した佛教を授けて知能を啓發せしめ、次で隋國と交りを経て更に高等の學問技藝を教へ玉ひ、元來伶俐なる兒童をして一躍俊敏なる青年に育てられたのである。太子が蘇我の馬子に應援して物部守屋を亡ぼし玉ひたるは、彼等兩人の私争に關與されたのでなく、國運の發展の爲にされたのである。法隆寺等幾多の寺を建立されたのは、土木の仕事に興味を有られたのではなく、之に由て各方面の知識、各種の藝術を振興して偉大なる文化を建設せんとの思召である。太子が外國文化を攝取されたの

は、彼の文化を模倣する爲でないことは、太子が支那全土に君臨した傲慢なる隋の煬帝に對し「日出づる國の天皇 謹んで日没する國の皇帝に曰す」と云ふ毅然たる國書を差つかはされ、彼をして後へに墜若たらしめられた事に由ても明白である。

なほ一言すべき事は、聖德太子は萬龍の御方で、政治、法制、經濟、宗教、文學、藝術等、一として精通せられざるなきは周知の事であるが、建築に關しては特に超凡の識見を有せられ、佛教渡來以後の建築の開祖として、即ち番匠の祖神として、今日に至つても一般の大工は聖德太子を奉祀してゐるのである。事實に於て、日本佛寺建築の基礎は太子の創建に係るものである。即ち太古の神社宮室の祖神は手置帆負命、彥狹知命であり、中古の佛寺の祖神は聖德太子であらせらるゝのである。

法隆寺以後の大寺の建築は多數に上るが、之に次ぐものとしては天平二年に建立された南都の薬師寺あり、現存するのは一基の三重塔である。この塔は一層二重の式で、一見六重塔に見へるのであり、其風格の高邁にして秀逸なること古今その比なき古建築であるが、委細は之を省略す。次で 聖武孝謙兩天皇の代に東大寺の大伽藍が建立された。東大寺は 聖武天皇の御發願により、菩提遷那を導師に、行基を勸進に、良辨を開基とする四聖建立の寺で、實に三國（日本・唐・天竺）一の大伽藍であつたが、惜むらくは治承四年に平重衡に焼かれ、源頼朝之を再建せしも、再び室町末の永祿十年に松永彈正秀久に焼かれ、江戸時代元祿寶永の間に三度再建したものが現在の東大寺であるが、昔日の面影は殆ど全く消失してゐる。

聖武天皇の東大寺は世界一の木造建築の巨構であり、今の大佛殿は昔時のものに比して僅に六割強の大きさである、東塔、西塔は高さ各三百二十數尺にして七重であり、境内の廣さは八町四方と稱さる。大佛殿の内部は、中央の盧舍那

佛、左右の協侍、四隅の四天王、何れも破格の巨軀であり、黄金を以て被覆し五彩を以て處理するの壯觀は蓋し日本空前の大工事である。斯の如くにして、天平時代は佛教建築の最盛期であつた。

下つて平安朝に至り、佛教の奈良六宗は衰頹し、天台眞言の勃興と共に漸く唐風を脱却し、漸次に日本化したのである。現存するこの時代の遺構は、最も有名なものに宇治の鳳凰堂がある。その建築は藤原頼通の建立にして、規模は小なれども悠然として萎縮の相なく、艶曲にして雅味深し。予は之を平假名建築と稱してゐる。即ち平假名文化の平安朝の代表的建築であり、稱して和様建築といふ。

次で鎌倉時代に入りて臨濟曹洞の禪宗の世となり、その建築も再び支那趣味を帯ぶるに至つた。之を唐様建築と稱す。鎌倉の五山はその代表的建築であるが、遺構の存するものは獨り北條貞時の建立にかゝる圓覺寺の舍利殿あるのみ

である。前時代末より當時代に互りて續出せる融通念佛、淨土、日蓮、眞、時の諸宗に屬する建築は和様に由て造られ、別に又天竺様と稱する一派は、再建の東大寺伽藍に適用された。

その後室町時代には、京都に禪宗の五山が興り、その遺構に東福寺伽藍がある。爾來佛教建築は漸く振はず、桃山時代に入り、織田信長の佛寺彈壓の暴舉に由て、佛寺の勢力は一頓挫を來した。彼が延暦寺を全滅し、石山本願寺を蕩掃せしより、豊臣徳川も亦た佛教に對する態度は往昔の如くならず。從て名建築の力作は漸次に減退して今日に至つたのである。若し今日にして佛教興隆の途を講ずるに非ざれば、爾今佛教建築も亦た振興するに難かるべし。

要するに佛教は元來外國傳來の宗教であり、しかも日本開關以來幾千年の後に傳來せるものなれば、假令完全に日本化すと雖も、その勢力は勿論我が神道に比すべくも非ず、試に支那を見れば、支那には五千年前の開關以來道教思想

あり、連綿として今日に至つて益々旺盛を極めてゐる。而して佛教は千八百餘年前の後漢に傳來し、一時強大なる威力を示したるも今や沈倫して頗る振はず。印度を見れば、印度にも五千年前の開闢以來婆羅門教の萌芽あり、生長して印度教となり、連綿として今日に至て益々猛烈を極めてゐる。而して佛教は二千五百年前に始めて起り、一時全盛を示したるも、約七百五十年前に全く消滅したるに非ずや、日本は素より支那・印度と日を同くして認るべからざるも以て日本佛教前途の殷鑑とするに足ると思ふ。

第五節 邸館、亭榭、茶室

邸館は王侯貴紳の住家であり、亭榭は多くは之に附屬する洒瀟なる小建築

で、茶室は茶道の儀禮に用ひられる藪爾たる建築にして、共に住家建築の系統に屬するものである。

邸館は堂々たる正格の規模を備へ、亭榭は環境と相待つて巧雅な風貌を主とし、茶室は閑寂枯淡の味を旨とする。之を文字に喩ふるならば邸館は、謹嚴なる楷書であり、一點一劃も忽にすべからず、而してその字劃は大體直線でなければならぬ。亭榭は自由なる行書であり、その字劃は直曲兩線を任意に處置してよく、茶室は即ち草書で、その字劃は婉轉流暢の曲線であり、その運用の妙は端睨すべからぬものがある。

邸館は奈良時代に於て、大官の住宅として既に定型をなしたが、唐の影響を強く受けてゐることは佛寺に於けると同様である。次で平安朝に至つて更に完成して寢殿造の規模となつたのである。

寢殿造は、南面する寢殿を中心とし、左右北の三方に對屋を配し、廊を以て